

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第145集

坂戸市

いな り まえ
稲 荷 前 遺 跡 (B・C区)

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— VIII —

(第2分冊)

1994

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

坂戸市

稲荷前遺跡(B・C区)

序

例言

凡例

(第1分冊)

I	調査の概要	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書刊行事業の組織	2
3	発掘調査・報告書作成の経過	2
4	発掘調査の方法	3
II	立地と環境	4
III	遺跡の概観	11
IV	B区の遺構と遺物	16
1	B区の概観	16
2	古墳時代前期の遺構と遺物	18
(1)	住居跡	18
(2)	方形周溝墓	26
(3)	土壌	55
3	古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物	56
(1)	住居跡	56
(2)	掘立柱建物跡	233
(3)	井戸跡	245
(4)	土壌	256
(5)	包含層	263
4	中・近世の遺構と遺物	265
(1)	掘立柱建物跡	265
(2)	井戸跡	272
(3)	土壌	278
(4)	溝跡	281
(5)	火葬墓	287
5	時期不明の遺構	289
(1)	井戸跡	289
(2)	土壌	290
(3)	土壌群	290
6	グリッド・表採遺物	292
(1)	縄文土器	292
(2)	弥生土器	292
(3)	グリッド出土土器	294
(4)	表採遺物	296

(第2分冊)

V	C区の遺構と遺物	301
1	C区の概観	301
2	古墳時代前期の遺構と遺物	306
(1)	住居跡	307
(2)	方形周溝墓	337
(3)	土墳	388
(4)	土墳墓	389
3	古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物	391
(1)	住居跡	392
(2)	掘立柱建物跡	534
(3)	竪穴状遺構	544
(4)	井戸跡	546
(5)	土墳	556
(6)	円形周溝状遺構	564
4	中・近世の遺構と遺物	566
(1)	掘立柱建物跡	567
(2)	竪穴状遺構	579
(3)	井戸跡	580
(4)	土墳	599
(5)	溝跡	601
(6)	敷石遺構	615
(7)	火葬墓	617
5	時期不明の遺構	618
(1)	土墳	618
(2)	井戸跡	618
6	ビット出土遺物	622
7	グリッド・表採遺物ほか	624
(1)	グリッド出土遺物	624
(2)	表採遺物	626
(3)	A区補遺	627

(第3分冊)

VI	調査のまとめ	635
1	古墳時代前期	635
(1)	出土土器について	635
(2)	遺構について	648
(3)	B区第1号土墳墓出土鉄剣について	651
2	古墳時代後期～平安時代	659
(1)	出土土器について	659
(2)	小形瓦について	668
(3)	集落変遷について	671
(4)	胎土分析結果から	680

(附篇)

1.	稲荷前遺跡出土土器胎土分析(土師器)鑑定報告	690
2.	稲荷前遺跡出土土器胎土分析(須恵器)鑑定報告	701

稻荷前遺跡C区



C区 方形周溝墓群

IV C区の遺構と遺物

1 C区の概観

C区は稲荷前遺跡の北東部に当る。東西約200m、南北150m程の範囲に展開し、B区とは狭い谷状地形を隔てて隣接する。遺跡はローム台地先端部(標高29~30m前後)に立地し、調査区北側には沖積地が広がっている。この沖積地は入西条里と呼ばれ、現水田面下からは古墳時代後期初頭の棚田遺跡が発見された。東側に延びる同一台地上には田島遺跡と桑原遺跡が隣接している。南側は浅い谷状地形が広がり、南に向かって緩やかに傾斜している。遺構分布からみると第19号溝跡をほぼ南限と考えてよく、それ以南は集落域としての利用はなされなかったものと考えられる。B区とは出土遺構の構成及び年代は類似し、立地面のみならず遺跡内容から見ても同一遺跡と認識して差し支えない。

検出された遺構は竪穴住居跡89軒、方形周溝墓19基、掘立柱建物跡17棟、井戸跡30基、土壇120基、溝跡31条、円形周溝状遺構2基、土壇墓1基等がある。時期的には古墳時代前期と古墳時代後期後半~平安時代、中世の3時期にわたって遺跡が形成されたものと考えられる。

古墳時代前期の遺構は竪穴住居跡が15軒、方形周溝墓が19基、土壇が2基、土壇墓が1基検出された。住居跡は調査区の中央部から北半にかけて散在する。周溝墓群との切り合い関係は第2号及び第8号住居跡の所見によると、周溝墓の方が新しいことが判明した。周溝墓は四隅切れタイプが8基、全周タイプが11基となり、B区の周溝墓に比較してタイプ構成は単純である。周溝墓群は基本的に北側の沖積地に面した台地縁辺に沿って帯状に分布する。一方、台地奥部(内陸部)には相対的に構築基数が少なく、空地が存在することからみて、墓域を形成する際に台地縁辺部が強く意識されていたものと考えられる。周溝墓は相互に近接するものはあっても直接切り合うものは認められなかった。

出土した遺物には二重口縁壺、小形埴、丸底鉢、台付甕など古墳時代前期の土器群がひととおり揃っている。また、それらとともに弥生時代後期の吉ヶ谷式土器の系譜を引く甕と壺が出土したことは、墓域を形成した集団の出自を暗示するものともいえ、注目される。

第1号土壇墓からは長さ80cmを超える鉄剣が検出された。当初、方形周溝墓との関わりも想定したが、鉄剣特徴を検討した結果、古墳時代前期でも後半、おそらく5世紀後半頃のものとして推定されるに至った。

古墳時代後期から平安時代の遺構は住居跡74軒、掘立柱建物跡7棟、井戸跡14基、円形周溝状遺構2基、土壇46基が検出された。およそ7世紀初頭前後から10世紀前半乃至中葉に至る間に累々と営まれたもので、特に調査区中央付近から東側にかけては激しく重複していた。集落構成の時期的な推移を概観すると、7世紀前半から8世紀後半頃までは数軒~10軒程度からなる集落が安定して維持されるが、8世紀末葉~10世紀代にかけては一時期を構成する住居数は1軒~3軒程度となり、集落とすると衰微の方向に向かうようである。しかし、A区、あるいはB区で遺物は出土したが遺構としては未確認であった、羽釜をもつ住居跡と思われる遺構が確認されたことは大きな成果の一



第273图 C区全测图(1/600)

つといてよい。おそらくこの段階の住居跡は掘り込みが浅いために出し難いのであって、集落そのものは羽釜を伴う段階までは確実に存続したものと考えてよいであろう。掘立柱建物跡は住居数に比して非常に少ない。これは各時期の遺構が複雑に重複していた影響によるものと思われる。おそらく性格不明のピットや土壌の中に建物となるものが相当数存在するものと考えの方が自然であろう。

出土遺物は土師器と須恵器を主体として、羽釜、施釉陶器、瓦、鉄器、青銅器、砥石などがある。稲荷前遺跡A区及びB区でも確認されたことであるが、土器構成は8世紀前半を境に急激に変わる。7世紀代は土師器の坏と甕が主体となっているが、8世紀に入り、越辺川対岸の鳩山窯跡群で須恵器生産が本格的に開始されると受給体制は一変するようで、特に供膳器は土師器から須恵器に取って替わられてしまう。8世紀中頃以降では土師器坏類は基本的に全く消滅すると考えて良いようである。

第38号住居跡からは円面碗の破片2個体と獸脚付短頸壺が出土した。いずれも出土数の少ないものであり注目される。第79号住居跡からは青銅製の帯金具の一つである巡方が出土した。約1/2を欠いているが鍍銀(?)された痕跡が認められる。

中世以降の遺構は掘立柱建物跡10棟、井戸跡12基、溝跡31条、火葬墓2基、竪穴状遺構2基、敷石遺構2基と、多数のピット群が検出された。大半の遺構は中世に属するものと推定され、溝跡の一部は近世以降に降るものがある。溝跡には直角あるいは「コ」の字形に屈曲するもの、礫が敷設されたものがあり、おそらく屋敷地を区画する溝跡と推定された。こうした区画は少なくとも3か所存在する。また、区画溝に東西を囲まれた中央部にも掘立柱建物跡と井戸跡が存在することからみると、この一角もまた居住域であったものと思われる。逆に区画溝内部に掘立柱建物跡が少ないことは問題点の一つである。やはり、本来は存在したものとみた方がよいであろう。屋敷地相互の関係については時期差があるのか併存するのか、出土遺物にかなりの幅があるため俄には決し難い。また、12基の井戸跡の存在は中世段階においても基本的に居住区として土地利用されたことを裏付

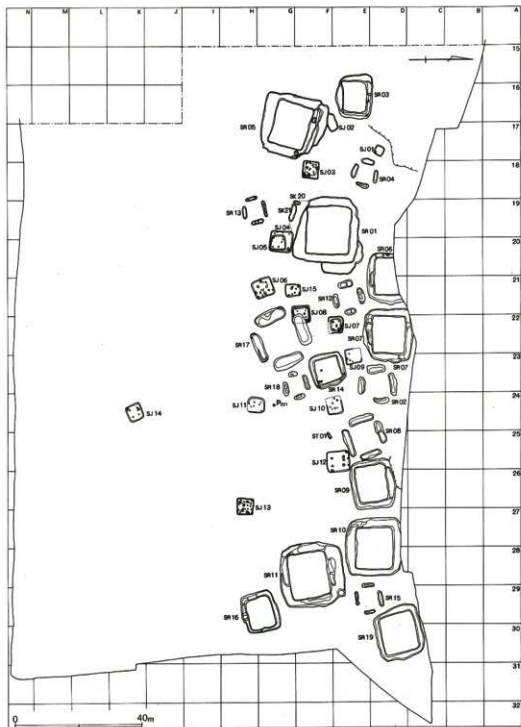
けるものといえる。

出土遺物は舶載陶磁器や瀬戸美濃産の陶器、常滑焼の甕と鉢、在地産と推定される鉢や内耳鍋、石臼のほか、井戸からは鎌倉時代末期～南北朝期の年号をもつ板碑、木製品などが出土した。板碑には南朝年号をもつものと北朝年号を記したものの両者がみられた。



C区全景(東より)

2 古墳時代前期の遺構と遺物



第274図 C区古墳時代前期の遺構配置図

(1) 住居跡

C区第1号住居跡(第275図)

C区北東部のD-17区に位置する。小形の住居跡で形態は方形を呈する。規模は長軸2.98m、短軸2.84m、深さ約10cmを測る。主軸方位はN-26°-Eを示す。

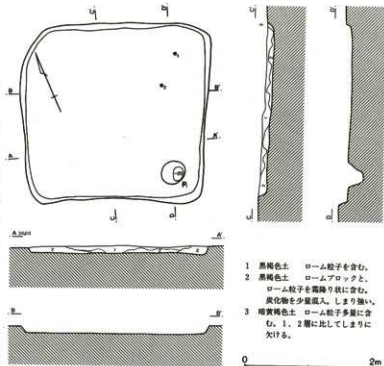
床面は概ね平坦であるが、中央部が若干深くなる傾向が認められた。

覆土は3層に分かれる。深度が浅いために詳細な埋没状況は明らかにできないが、第2層中にはロームブロックが霜降り状に含まれ、上面が大きく波打ったような状況が観察されることから、一部にせよ人為的な埋め戻しがあったものと推定される。

炉は検出されなかった。

貯蔵穴と思われる小ピットは南東コーナーから検出された。形態は円形を呈し、規模は長径38cm、短径34cm、深さは25cmを測る。

出土遺物はきわめて少ない。小形高環はヘラミガキ調整され脚部に透し穴が穿たれている。



- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックと、ローム粒子を霜降り状に含む。炭化物を少量混入。しまり強い。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量に含む。1、2層に比してしまりに欠ける。

第275図 C区第1号住居跡



第276図 C区第1号住居跡出土遺物

C区第1号住居跡出土遺物観察表(第276図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	高環		2.7		ABC	A	褐灰	80%	No1 覆土(+5cm) 無彩
2	環		1.7		ABC	A	灰オリブ	30%	No2 床面 混入

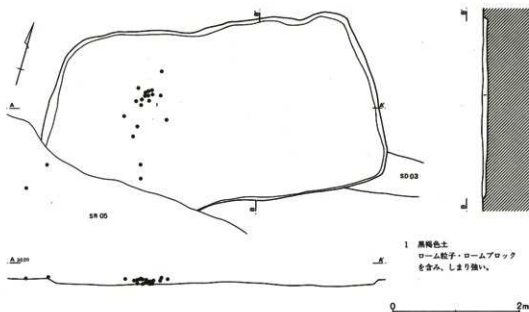
C区第2号住居跡(第277図)

E・F-16-17区に位置し、第5号方形周溝基北溝に切られていた。形態は不整長方形を呈し、規模は長軸5.24m、短軸2.80m、深さは5cm前後と非常に浅い。主軸方位はN-68°-Eを示す。

床面はやや凹凸があり一定しない。

覆土は黒褐色土単層で土層変化は見られなかった。

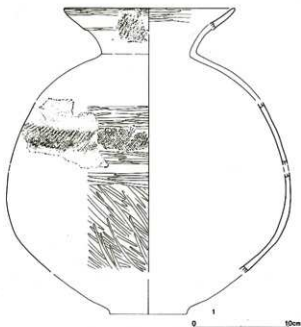
炉跡や貯蔵穴、柱穴等の付属施設は検出されていないこと、形態も整っていないことなど、通常の住居と同一視して良いかどうか疑問もある。



第277図 C区第2号住居跡

出土遺物は壺が1点検出されたのみである(第278図1)。これは小破片に割れ、散乱したような状態で覆土から床面及び、一部は第5号方形周溝基北溝内からも出土している。

第278図1の壺は口縁部と胴部片からなり直接接合しないが同一個体と思われる。複合口縁と胴部に2段にわたり縄文帯が巡る(単節LR横位施文)。口縁内面と胴部上半の縄文帯を除いた部分には赤彩が施されている。推定口径18.0cm。胎土に石英と白色粒子、白色針状物質を含み、焼成は良好である。色調は橙色。註記No.2・7他。

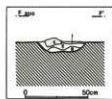
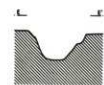
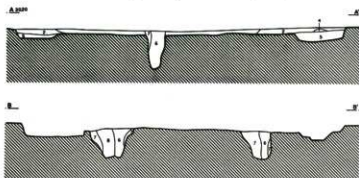
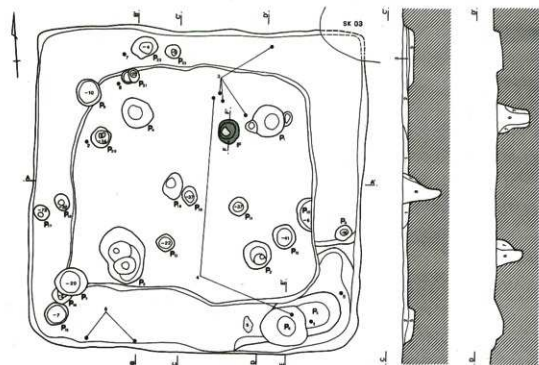


第278図 C区第2号住居跡出土遺物

C区第3号住居跡(第279図)

F-17・18区に位置し、第3号土壇に北東隅を切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸5.24m、短軸5.10m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-7°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。住居覆土は基本的に3層に分かれるが、深度が浅いこともあり堆積環境の詳細は明らかにはできなかった。第4層は床面上に堆積した焼土、第5層は掘方埋土である。掘



- | | |
|--------|----------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム小ブロック・焼土小ブロックを含む。 |
| 3 赤褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 4 赤褐色土 | 床面上に堆積した焼土層。 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック多量混入。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子少量混入。 |
| 7 明褐色土 | ロームブロック多量混入。粘性あり。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子多量混入。 |

- | | |
|-----------|---------------------|
| 9 I 暗黄褐色土 | ローム主体に、焼土粒子・暗褐色土混入。 |
| II 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物混入。 |
| III 赤褐色土 | 焼土。 |

0 2m

第279図 C区第3号住居跡

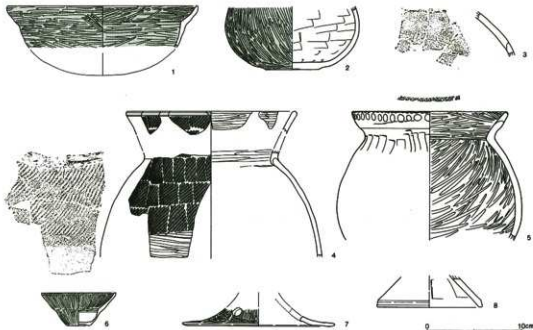
方は壁際を方形周溝基の周溝状に全周していた。

炉は住居中央からやや北東に寄った位置に設けられていた。形態は楕円形を呈し、規模は長径40cm、短径34cm、床面から8cm程掘り込まれている。いわゆる地床炉で底面には焼土が堆積していた(第III層)。炉内には炉石と思われる礫が遺存するが底面よりもやや浮いている。

貯蔵穴にはP₀が相当するものと考えられるが、埋土の状態は明らかではない。形態は円形を呈し、規模は長径70cm、短径62cm、床面からの深さは40cm程である。

ピットは住居内から24本検出された。P₁~P₄は支柱穴である。深さ40~50cmと何れも深い。断面観察から柱は抜き取られたものと推定される。他のピットの大半は中世の所産と推定される。

出土物は比較的少ない。第280図1は有段口縁鉢。3は壺肩部片で上端に縄文帯(無節R)、以下はヘラミガキと赤彩が施される。4は吉ヶ谷系の甕と思われる。口縁部と胴部は接合しないが同一個体と考えられる。口縁下端は「く」の字状に強く屈曲し胴部上半と口縁部は縄文(単節LR)が横位に施文される。5は甕か。器壁は極めて厚く口唇部に縄文、胴部外面はヘラナア、内面はヘラミガキが施され光沢を帯びる。6は小形の平底増で底部は上げ底。口縁部と胴部外面は赤彩される。7は小形高坏脚部か。8は器種が不明確である。



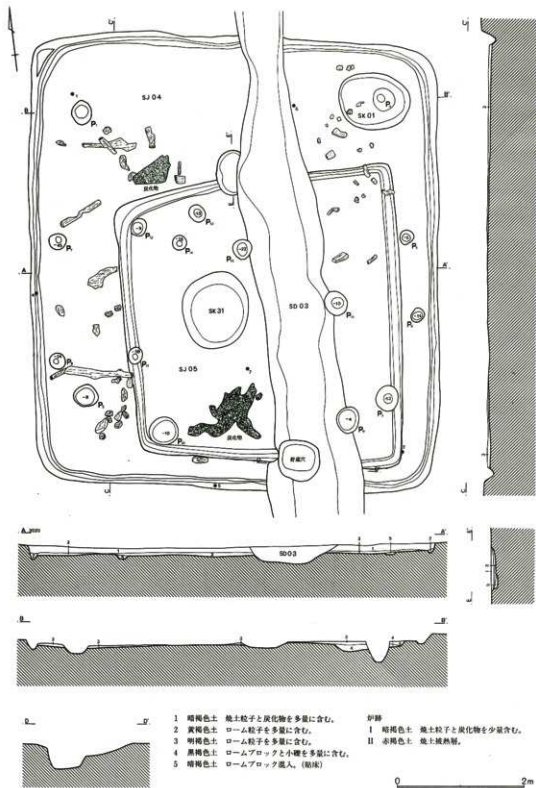
第280図 C区第3号住居跡出土遺物

C区第3号住居跡出土遺物観察表(第280図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(20.0)	4.3		ABC	A	浅黄橙	20%	No19 覆土(+11cm) 全面ミガキ 赤彩
2	壺		6.6	5.6	ABC J	A	にぶ黄	25%	No11 覆土(+15cm) 赤彩
3	壺				ABCE	B	にぶ黄		No4~6, 8 床面
4	甕	(17.6)	15.3		ABC	A	にぶ黄	10%	No3, 18 覆土(+5cm)+P ₁ 内(-18cm)
5	甕	(16.0)	13.4		ABC	A	浅黄	20%	No23 覆土(10cm)
6	小形増	7.8	3.4	2.3	B	A	にぶ黄	80%	No32他 覆土(+19cm) 赤彩
7	高坏		1.8	(16.2)	ABC	A	橙	15%	No24 覆土(+25cm) 赤彩
8	台付甕		3.4	(11.0)	ABC	B	にぶ黄	15%	No2 覆土(+4cm)

C区第4号住居跡(第281図)

G-19-20区に位置する。大型の住居跡で第5号住居跡の上部に構築され、第3号溝跡の擾乱を受けていた。形態は整った方形を呈し、規模は長軸7.06m、短軸6.44m、深さ10~20cmを測る。主軸



第281図 C区第4・5号住居跡

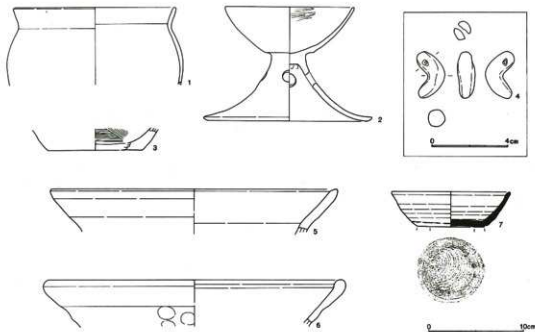
方位はN-5°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で部分的に貼床されていた(第3層)。覆土には焼土と炭化物を多量に含む褐色土が堆積しており、また、床面上には炭化材や炭化物が残されていたことから火災住居と考えられる。

炉は住居中央からやや北に寄った位置に設けられ、東半は第3号溝跡に破壊されていた。地床炉と考えられ、底面は被熱していた。貯蔵穴は南壁際の中央からやや東に寄った位置に設置される。上面は溝に削平され堆積状態は良く判らない。形態は方形を呈し、規模は長径68cm、短径62cm、床面からの推定深度は33cmを測る。

ピットは16本検出された。調査時においてP₁~P₄を支柱穴に想定したが、深度が浅く壁に寄りすぎる点で疑問がある。他のピットは住居よりも新しい時期の所産と思われる。また、住居北東部から浅い土壌(SK01)が検出されたが、掘方と推定される。第31号土壌は住居よりも新しい段階、出土遺物からおそらく8世紀後半頃の所産と思われる。壁溝は幅15~20cmで壁に沿って全周する。

出土遺物は少ない(第282図)。1は表面が風化しているが、ナデ整形か。2の小形高坏は脚部透穴が4孔。4は土製勾玉で西壁直下から出土した。全長2.5cm、最大厚0.95cm。5~7は混入。



第282図 C区第4号住居跡出土遺物

C区第4号住居跡出土遺物観察表(第282図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(16.7)	8.1		ABC	C	にぶい焼	15%	No1 覆土(+8cm)
2	高坏	13.5	11.9		ABC	B	にぶい焼	60%	No16,19 床面 脚径1.7cm
3	壺		2.3	(10.0)	AB	A	にぶい焼	10%	覆土 外面ナデ、内面ハケ目
4	勾玉								No21 周溝内(-4cm) 土製 表面赤彩
5	鉢	(31.0)	5.0		ABI	B	暗灰	5%	No17 覆土(+10cm) 混入
6	鉢	(30.0)	4.7		ABI	B	褐灰	5%	No2 覆土(+6cm) 混入
7	坏	12.4	3.7	7.0	ABC	B	灰	100%	No42 覆土(+12cm)

C区第5号住居跡(第281図)

G-19・20区に位置する。第4号住居跡床面下から検出され第3号溝跡の攪乱を受ける。入れ子状に重複することから本住居跡から第4号住居跡に建替えられたものと推定される。形態はやや歪んだ長方形を呈し、規模は長軸4.80m、短軸4.40m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-2°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で上部を4号住居跡の貼床面が覆っていた。

炉跡は検出されなかった。おそらく溝跡に破壊されたものであろう。伴う柱穴も明確にできなかった。壁溝は幅20cm、深さ5~10cmで全周する。出土物はないが重複関係から五領期と考えられる。

C区第6号住居跡(第283・284図)

G・H-21区に位置する。南壁部上面は第26号住居跡に切られ、西壁付近は第35・37号土壌の攪乱を受けていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸6.40m、短軸5.14m、深さ約30cmを測る。主軸方位はN-20°-Wを示す。

床面はほぼ平坦であるが、東側に向かって僅かに深くなる傾向が認められた。また、床面上には焼土や炭化物、炭化材が堆積しており、火災を受けたものと推定される。覆土は基本的に3層に分かれ、焼土やロームの含有量が多い。また、覆土を切り込んだ土壌(S K37)や土層の乱れが確認され、後世攪乱を受けた様相が窺われる。

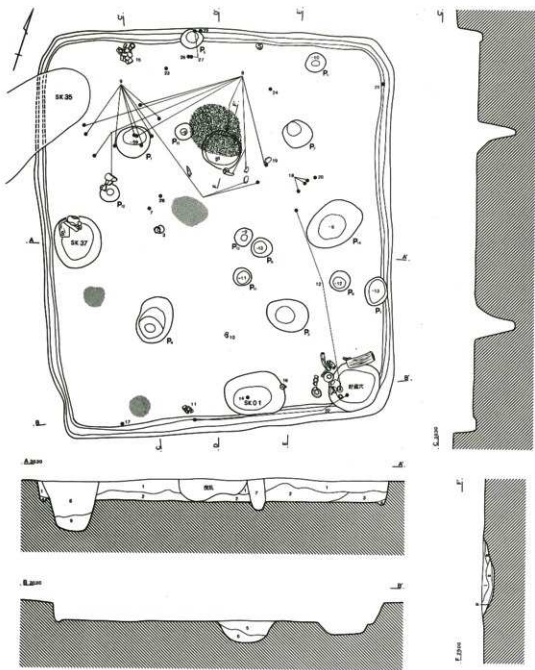
炉跡は住居中央からやや北に寄った位置に検出された。直径60cm程の円形地床炉で、底面は皿状に凹み被熱していた。

貯蔵穴は南東コーナーに位置する。形態は円形を呈し、規模は直径80cm、深さ25cmを測る。上面は焼土混じりの炭化物層が堆積していたが、貯蔵穴内に落ち込んだ状態は観察されないこと、また、埋土に多量のロームブロックが含まれていたことから住居廃棄時に貯蔵穴として機能していたかどうか疑わしい。寧ろ、隣接する1号土壌(S K01)を最終的な貯蔵穴と考えた方が遺物の接合状況からも合理的と思われる。

ビットは14本検出された。P₁~P₄は住居対角線上に規則的に配置され支柱穴と判断される。他のビットの大半は後世の所産と考えられる。

壁溝は深さ5cm程と浅いが全周していた。

出土物は少ないが、貯蔵穴周辺と炉の周囲に比較的纏まっていた。第285図1・2は有段口縁鉢。口縁部外面の段は不明瞭で底部は上げ底状を呈する。赤彩痕はない。3~5は小形壺。3は成整形が雑で歪みが激しい。外面ケズリ後雑なミガキが施される。4は口縁部外面はへら状工具によるナデと思われる。胴部は1か所幅広く器面が剥落し、中心部は貫通していた。割れ口から判断して打点は内面にあると思われ、意識的に穿孔された可能性がある。6~8は壺で、6は幅狭の複合口縁壺で口縁部は横ナデ、頸部以下は粗い刷毛目の後部分的にミガキ。10~12は高坏類。11の小形高坏脚部には透穴(3孔)が2段穿たれていた。14は小形器台。9・13・15・16は台付甕と思われる。9は胴部以下を欠くが口縁部は「く」の字に外反し、胴部は球形に張る。口縁から胴部は刷毛目というより



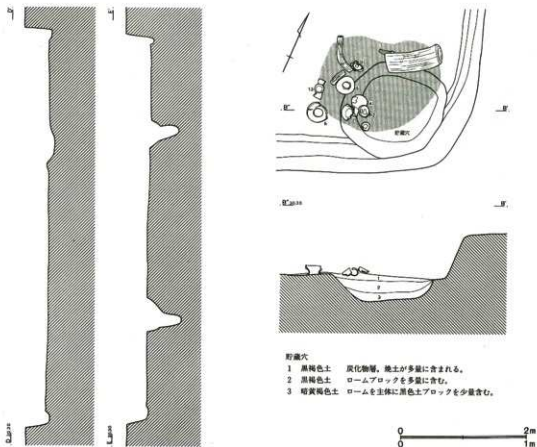
- 1 黒褐色土 ローム粒子和焼土粒子をやや多く含む。
- 2 黒褐色土 多量のロームブロック・ローム粒子和焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 多量のロームブロック・焼土ブロックを含み、層下
面に炭化物が薄く堆積する。
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含みやや軟質。
- 5 黒褐色土 ローム粒子和ロームブロックと焼土を少量含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子和焼土粒子を少量含む粘性が強い。
- 8 黒褐色土 ロームブロックと炭化物を少量含む。
- 9 灰褐色土 ローム粒子を少量含む粘性がある。

IV層

- I 暗褐色土 多量のロームブロックと焼土・炭化物粒を含む。
- II 赤褐色土 焼土粒子を多量に含む。
- III 黒褐色土 多量の炭化物と少量の焼土ブロックを含む。
- IV 赤褐色土 地山被熱層。

0 2m
0 1m

第203図 C区第6号住居跡(1)

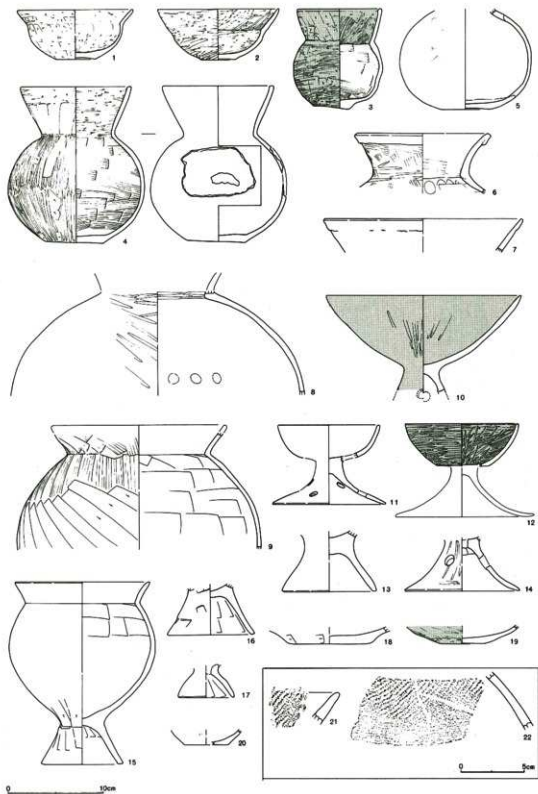


第284図 C区第6号住居跡(2)

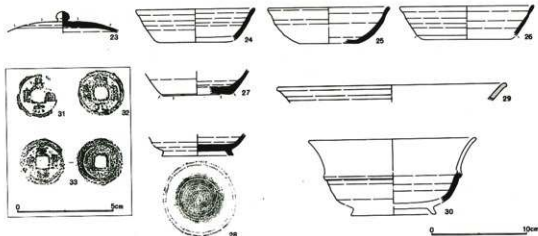


木口ナデに近い。胴部中位は削られている。15は小形の台付甕で口縁部は横ナデ、胴部はナデ調整される。17はミニチュア。21は壺の口縁部で外面縄文(単節LR)が横位に施文され、内面はミガキと赤彩痕が残る。22は壺肩部片で、外面は縄文(単節LR)が横位施文され下端はミガキ。

第286図23～33は混入遺物で覆土上層から出土したものが多く、31～33は覆土から出土した古銭で4枚鋳着したうちの3枚である。遺存状態は悪く、1枚は分離できない。31は皇宋通寶。北宋銭で1039年初鋳。32は開元通寶。唐銭で621年初鋳。33は元豐通寶。北宋銭で1078年初鋳。



第285图 C区第6号住居跡出土遺物(1)



第286図 C区第6号住居跡出土遺物(2)

C区第6号住居跡出土遺物観察表(第286図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	12.0	5.2	4.0	ABC	B	にょい青	80%	No235 覆土(+5cm) 無彩
2	鉢	(12.6)	5.3	3.4	ABC	A	にょい青	45%	No241 貯穴内上層 無彩
3	小形壺	(8.8)	10.5	3.8	ABC	B	にょい青	80%	No220 床面 赤彩
4	壺	11.6	16.4	6.0	ABC	A	にょい青	80%	No238 貯穴内(-3cm) 無彩
5	壺		10.0	6.2	ABC	B	にょい青	10%	No256 覆土上層
6	壺	13.5	6.3		ABC	B	にょい青	85%	No242 床面
7	壺	(20.7)	3.5		ABC	B	にょい青	10%	No97 覆土(+19cm)
8	壺		10.8		ABC J	B	橙	25%	No79, 82, 他 覆土(+2~14cm)
9	台付甕		12.3		ABC J	B	にょい青	35%	No83, 90, 他 覆土(0~+18cm)
10	高 环	20.4	10.3		ABC	B	橙	60%	No233 床面 赤彩
11	高 环	(10.7)	8.3	(11.8)	ABCE	B	橙	55%	No245, 250 床面 小形
12	高 环	11.8	4.5		ABC	A	にょい青	95%	No193, 239 覆土(+5~18cm) 小形 赤彩
13	台付甕		6.3		ABC	C	にょい青	60%	No237 床面 脚径9.5cm
14	器台		5.6		ABC	B	にょい青	20%	No240 覆土(+7cm) 脚径(12.0cm)
15	台付甕	(14.0)	19.0		ABC	B	褐灰	70%	No215 覆土(+4cm) 脚径8.5cm
16	台付甕		5.3		ABC J	B	にょい青	100%	No243 床面 脚径8.5cm
17	台付甕		3.4		ABC	A	にょい青	30%	No213 床面 脚径(5.6cm)
18	壺		1.9	4.5	ABC	A	にょい青	35%	No217 床面
19	壺		1.8	8.5	ABC	B	にょい青	60%	No84~86 覆土(+15~18cm) 赤彩
20	小形壺		1.7	(4.6)	ABC	A	浅黄橙	20%	No135 覆土(+19cm)
21	壺				ABC	A	にょい青		No164 覆土(+32cm)
22	壺				ABC	A	にょい青		No248, 249 床面
23	蓋		2.3		ABC	A	灰	25%	No138 覆土(+30cm) 鈕完存
24	环	(12.4)	3.3		ABC	A	灰	15%	No107 覆土(+30cm) 口縁内面磨減
25	环	(12.6)	3.7	(6.4)	ABC	B	青灰	35%	覆土 混入 底部糸切り
26	环	(14.0)	3.1		ABC	A	灰白	10%	No140 覆土(+34cm)
27	环		2.5	7.0	ABC	A	青灰	50%	No140, 159 覆土(+31~34cm)
28	高台环		2.2	7.4	ABC	A	オリーブ灰	80%	No94 覆土(+28cm)
29	盤	(23.7)	1.8		G	A	明青灰	5%	No181 覆土(+30cm) 灰釉?
30	高台碗		3.2		ABC	A	灰	10%	覆土 佐波理模倣柄か

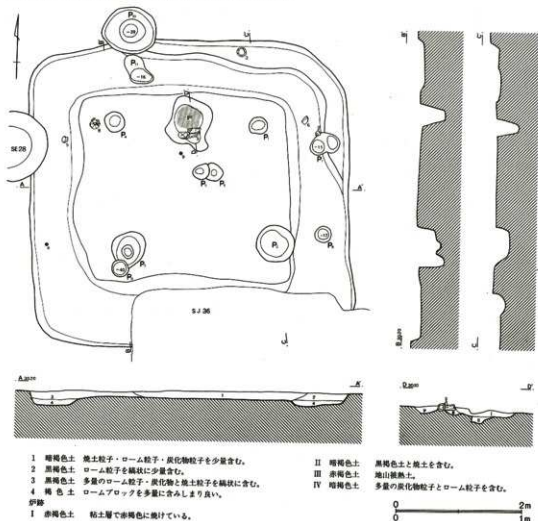
C区第7号住居跡(第287図)

E・F-22区に位置し、第36号住居跡に南壁を、第28号井戸跡に西壁部を切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸5.06m、短軸4.74m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-3°-Wを示す。

床面はほぼ平坦であるが、壁際は方形周溝状に掘方が廻り、その上部に貼床されていた。覆土は4層に分かれるが、ロームが縞状に堆積するなど、部分的にせよ人為的な埋め戻し行為が想定された(第2・3層)。

炉は住居中央からやや北寄り、P₁とP₄間を結ぶ線上に位置する。形態は不整形円形を呈し中央よりやや突出する。規模は長径94cm、短径82cmで、底面には粘土が貼り付けられていた。いわゆる粘土板炉と考えられ、粘土は強く被熱し焼土化していた(第I層)。また、炉の南側には3個の礫を配した炉石が埋設されていた。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは住居内及び壁に掛かって11本検出された。P₁~P₄は住居の対角線上に規則的に配置され、主柱穴と考えられる。

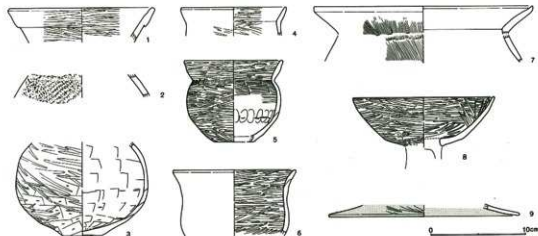


第287図 C区第7号住居跡

出土遺物は少ない。第288図1は複合口縁壺で内外面に横方向のミガキが加えられる。2は壺肩部で外面に粗い縄文(単節LR)が施文される。4・6は小形の鉢か。外面調整は不明瞭、内面は磨かれている。3・5は小形壺。7は刷毛調整の甕口縁部小片で、胴部とは直接接合せず器形は推測の域を出ない。口唇部は尖り気味に積み上げられている。8・9は小形高環。9の裾は水平近く開いている。



7号住居跡炉跡断面



第288図 C区第7号住居跡出土遺物

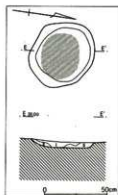
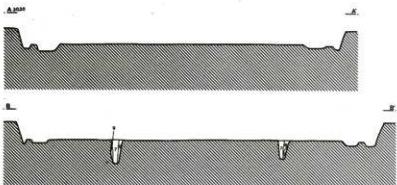
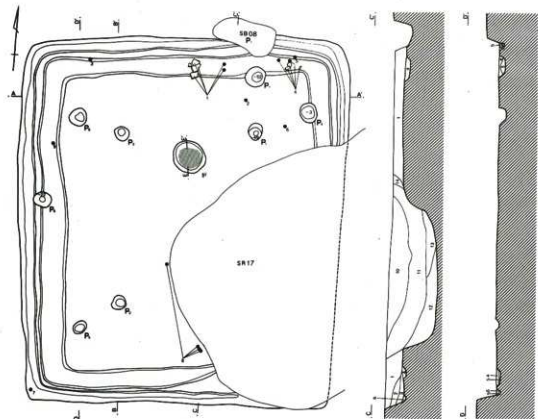
C区第7号住居跡出土遺物観察表(第288図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(14.9)	3.6		AB	A	にぶい壺	10%	覆土 内外面ミガキ
2	小形壺				ABC	C	にぶい壺		No13 覆土(+5cm)
3	小形壺		9.7	4.0	ABC	A	橙	75%	No11 床面
4	小形鉢	(11.0)	3.0		ABC	A	にぶい壺	10%	No6 覆土(+5cm)
5	小形壺	10.2	8.5	(4.2)	AB	A	にぶい壺	50%	No7 覆土(+6cm)
6	鉢	(12.7)	6.9		ABC	A	にぶい壺	25%	No12 床面
7	甕	(23.0)	5.9		AB	A	灰褐	10%	覆土
8	高環	(14.8)	5.1		AB	A	赤	60%	No7,10 覆土(+3~6cm)
9	高環		1.2	(20.0)	ABC	A	にぶい壺	5%	No8 床面 赤彩

C区第8号住居跡(第289図)

F・G-21・22区に位置し、住居東南部を17号方形周溝墓によって大きく挟られている。形態は方形を呈し、規模は長軸5.76m、短軸5.20m、深さは20~30cmと比較的深い。主軸方位はN-5°-Wを示す。

床面は概ね平坦で全体的に堅く踏み固められていた。住居覆土はあまり土層変化は顕著ではなく、



- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色土 ローム粒子和ロームブロックを少量含む。
 2 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
 3 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 4 黒褐色土 多量のロームブロックと黒色土が混じる。
 5 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 6 明褐色土 多量のローム粒子和砂粒・炭化物粒子を含む。
 7 黒褐色土 ローム粒子和少量含む。
 8 暗褐色土 ローム粒子和ロームブロックを含む。
 9 明褐色土 ロームブロックを多量に含む。</p> | <p>10 黒褐色土 灰色粘土ブロックと少量のロームブロック含む。
 11 暗褐色土 多量のローム粒子和焼土粒子を微量含む。
 12 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性あり。
 13 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
 14 黒褐色土 少量のロームブロックと焼土粒子を含む。
 炉跡
 I 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子を少量含む。
 II 赤褐色土 焼土粒子を多量に含む。</p> |
|--|--|

0 2m

第269図 C区第8号住居跡

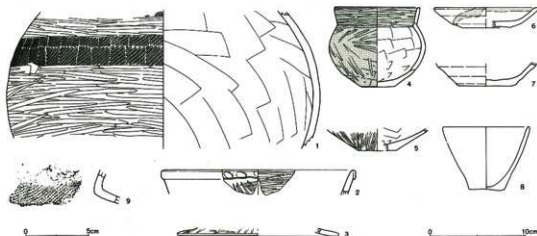
基本的にローム混じりの暗褐色土で構成されていた(第1~3層)。

炉は住居中央からやや北に寄った位置に設置される。直径50cm程の円形プランを呈し、底面は皿状に掘り込まれている。深さは約5cmと浅い。いわゆる地床炉で、底面中央部の地山は赤褐色に被熱していた。埋土は上層に炭化物粒子を含む暗褐色土が、下層に焼土が多量に含まれていた(第I・II層)。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは8本検出された。P₁~P₃は深さ30~50cmと深く規則的に配置されることから主柱穴に相当するものと考えられる。P₄~P₈も配置は規則的であるが深度が非常に浅く柱穴とならないであろう。

壁溝は二重に巡っている。断面観察及び床面の状況から内側の壁溝が古く、外側の壁溝が新しいことが判明し、住居を拡張した結果と考えられる。

出土遺物は少ない。第290図1は壺胴部片で、肩部と胴部上半に2段にわたって縄文帯(上段は単節R L、下段は単節L R横位地文)をもつ。縄文帯以外の部分はヘラミガキと赤彩が施されている。内面はヘラナデ。白色針状物質は確認できない。2は壺か。口縁部は幅狭く折り返し、軽い指押さえとヨコナデが加わる。頸部と内面はミガキ。3は器種が良くわからない。高坏脚部としたが透穴がない。小形の鉢であろうか。4は小形壺、9は壺頸部で胴部上端に縄文(単節L R)が横位に施される。6・7は混入品である。



第290図 C区第8号住居跡出土遺物

C区第8号住居跡出土遺物観察表(第290図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺		14.5		AE	A	淡黄	25%	No41, 42, 他 覆土(0~+4cm)
2	壺	(17.8)	2.6		ABC	A	橙	5%	No11 床面
3	高坏	0.8	(16.2)		ABC	A	白っぽい	15%	No70 壁脚部か
4	小形壺	8.8	8.3	3.6	ABC J	B	浅黄橙	60%	No25, 51, 他 覆土(0~+4cm) 赤彩
5	壺		2.3	(4.0)	ABC	A	白っぽい	25%	No26 覆土(+15cm)
6	小皿	(10.8)	2.1	(5.2)	B	A	灰白	45%	No9 床面 混入 灰釉小皿
7	皿		2.4	5.8	C	A	浅黄橙	60%	No1 覆土(+8cm) 混入
8	鉢		6.6	9.0	ABC	B	淡黄	60%	No20, 28~30 覆土(+4~9cm)
9	壺				ABC	B	浅黄橙		No6 覆土(+10cm)

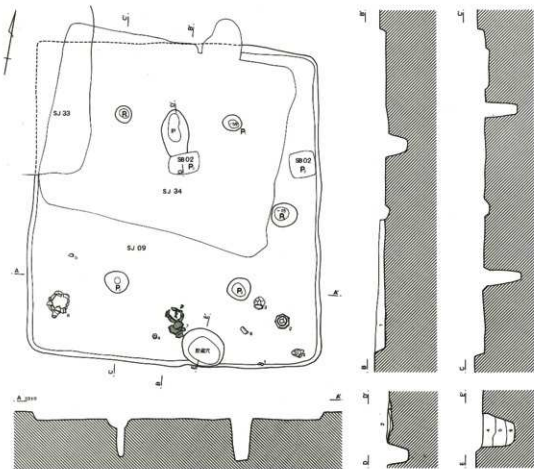
C区第9号住居跡(第291図)

E-22・23区に位置する。第33・34号住居跡に住居北半を削平されるほか、第2号掘立柱建物跡柱穴の攪乱を受け、遺存状態は悪い。形態は長方形を呈し、規模は長軸5.16m、短軸4.62m、深さ約10cmを測る。主軸方位はN-12°-Wを示す

床面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土が主体となる(第1層)が、全体的な堆積状態は不明である。

炉は第34号住居跡の床面下に辛うじて残存していた。南端部は第2号掘立柱建物跡柱穴によって壊されている。形態は長楕円形を呈し、残存規模は長径80cm、短径44cmを測る。確認面からの深さは10cm程で、底面(火床面)は被熱により焼土化していた。

貯蔵穴は南壁直下の中央から僅かに東に寄った位置に設置される。形態は楕円形、規模は長径70



- 1 黒褐色土 焼土粒子和ローム粒子を微量含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒子を多量に含む。

- 貯蔵穴
- 4 黒褐色土 シルト質でロームを少量含む。良く締まっている。
- 5 黒褐色土 シルト質。泥人物は殆どない。
- 6 黄褐色土 シルト質でソフトロームを多量に含む。

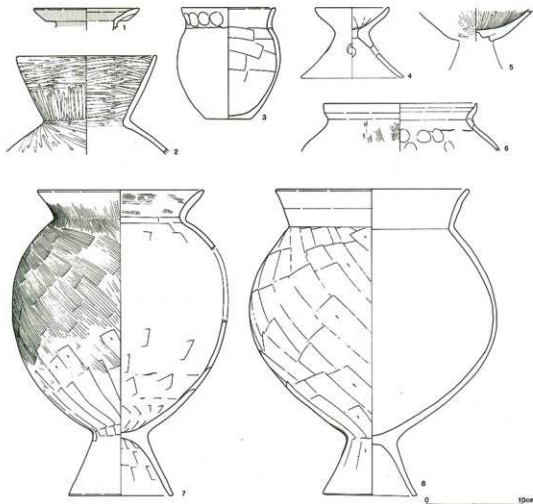
0 2m

第291図 C区第9号住居跡

cm、短径60cm、深さ50cmを測る。

ピットは5本検出された。P₁～P₄は深さ50cmを超え、規則的に配置されることから支柱穴と考えられる。P₅の帰属は不明である。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少ないが、貯蔵穴の周辺から比較的纏まって出土している。第292図1は複合口縁の小形壺で、口縁外面に粘土を貼り付けている。頸部は短く残存部以下は胴部に移行する模様である。風化が激しく整形は不明。赤彩痕は僅かに残るが内面頸部については良くわからない。3は小形壺、または鉢で口縁部に指頭痕が残るが、他の整形は不明。4は小形器台で脚部下半を欠く。透穴は4孔、全体に風化している。6は口縁部が受け口状を呈する甕。風化により整形は不明瞭であるが胴部外面に刷毛目、内面に指頭痕が残る。7・8は台付甕でそれぞれ床面に潰れた状態で出土した。7は口縁部刷毛目整形で、上半はヨコナデされる。胴部も刷毛目であるが下半は不明瞭でヘラケズリ痕が残る。脚部整形はナデか。8は胴部中位に最大径をもち、口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ後ナデ調整で下位はミガキ風に見える部分がある。



第292図 C区第9号住居跡出土遺物

C区第9号住居跡出土物観察表(第292図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小形壺	(11.0)	2.2		ABCJ	B	橙	25%	No4 覆土(+6cm)
2	壺	14.6	10.3		ABC	B	にぶい黄	100%	No8 床面
3	小形甕	9.8	11.6	4.8	ABC	B	にぶい黄	85%	No6 床面
4	器台	(7.6)	4.3		ABCJ	B	にぶい黄	90%	No2 床面
5	高坏		3.3		ABC	B	浅黄橙	80%	No10 覆土(+4cm)
6	甕	(16.0)	5.0		ABC	C	にぶい黄	20%	No5 覆土(+6cm)
7	台付甕	17.4	32.0	10.8	ABCE	B	にぶい黄	60%	No3 床面
8	台付甕	20.0	32.1	9.0	ABC	A	にぶい黄	70%	No1 覆土(+4cm)

C区第10号住居跡(第293図)

E・F-24区に位置し、西壁から南壁にかけて第6号溝跡と第51号住居跡に切られていた。また、第3号掘立柱建物跡による擾乱も受け遺存状態はあまり良くない。形態は方形を呈するものと推定され、規模は確定できないが凡そ推定線の範囲と考えて良からう。南北長4.84m、東西長は残存値で4.52m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-80°-Eを示す。

床面は平坦である。覆土は基本的に2層に分かれ(第1・2層)、特に人為的な堆積を示すような状況は認められなかった。

炉跡はP₁とP₄のほぼ中間、住居中央からやや東に寄った位置に設けられていた。いわゆる地床炉で、形態は楕円形を呈し、規模は長径60cm、短径40cm、深さ10cmを測る。底面は皿状に凹み、埋土には焼土が多量に含まれていた。

貯蔵穴は第6号溝跡に上面を削平されていたが、下部は残存している。形態は楕円形を呈し、規模は長径72cm、短径44cm、深さ22cmを測る。

ピットは6本検出され、P₁~P₄は住居対角線上に規則的に配置され主柱穴と考えられる。P₅・P₆については伴う可能性は低いであろう。

壁溝は南壁部西半で確認できなかったが、東壁と北壁では壁に沿って巡っている。深さ5cm前後と全体に浅い。

出土遺物は少なく、覆土上層からは古墳時代後期以降の遺物が数点出土している。

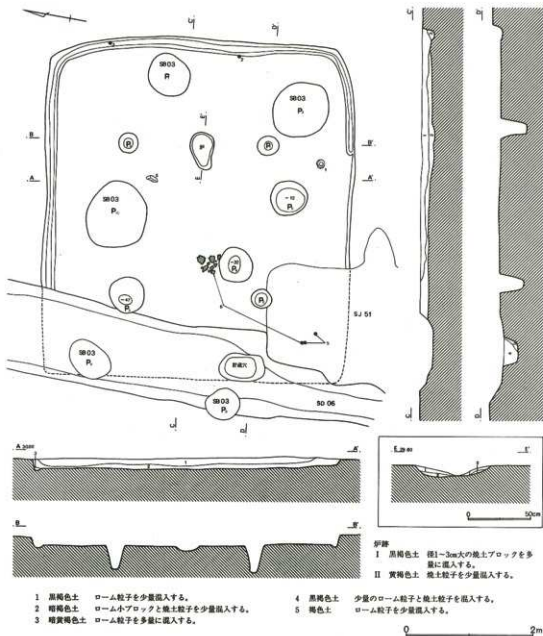
第294図1~4は混入品と考えられる。

5は台付甕と思われる。風化が激しく整形痕を留めない。

6は壺で、接合しない2片からなるが胎土及び色調から同一個体と考えられる。口縁部は残存しない。やはり風化しており整形は不明である。



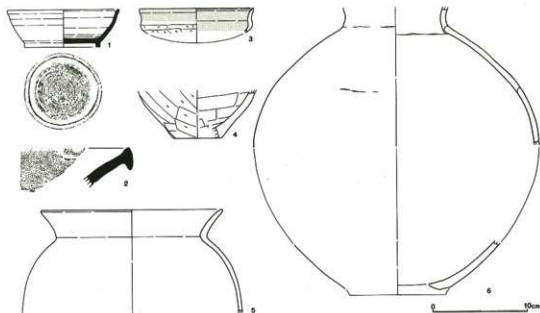
C区第10号住居跡



第293図 C区第10号住居跡

C区第10号住居跡出土遺物観察表(第294図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高台杯	11.7	3.9	7.8	ABC	A	灰	95%	No22 覆土(+10cm)
2	甕				ABC	A	灰		No11 覆土(+10cm)
3	杯	(11.9)	2.6		ABC	B	にがい骨	25%	No2 覆土(+8cm)
4	甕		5.0	(5.0)	ABC	A	にがい骨	60%	覆土
5	台付甕	(19.0)	10.8		ABC	C	橙	40%	No6,8 床面
6	壺				ABC	C	にがい骨	25%	No13, S25No6 覆土(0~+5cm)



第294図 C区第10号住居跡出土遺物

C区第11号住居跡(第295図)

G・H-24区に位置する。第16号溝跡・第20号井戸跡や土壌、ビットの攪乱を激しく受け遺存状態は悪い。形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.20m、短軸4.50m、深さ15cmを測る。主軸方位はN-8°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で全体に堅く締まっているが、溝の攪乱を受け遺存しない箇所がある。住居覆土は9層に分かれるが、全体にロームブロックの混入が多く、全てが自然堆積とは思われない。

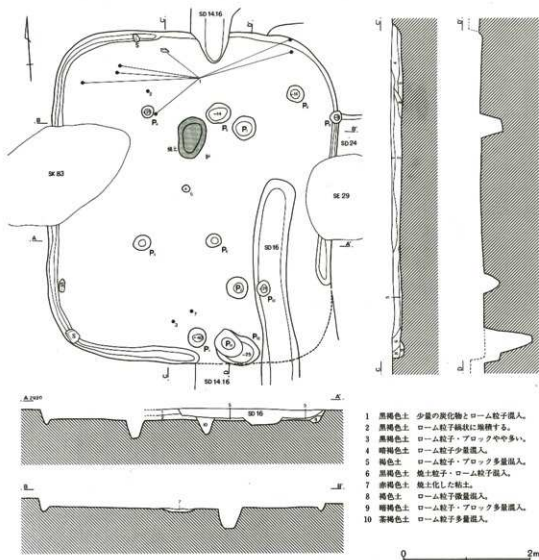
炉は住居中央からやや北に寄った位置に設けられていた。形態は円形を呈し、規模は直径55cm、深さは5cmと浅い。掘り込み部分は粘土で被覆され上面から底面まで赤褐色に被熱していた。

貯蔵穴は南壁直下に位置するP₁₂がそれに相当するものと考えられる。P₁₁に切られており全体は不明瞭であるが、上面の形態は楕円形で、規模は長径65cm、短径45cm、深さは25cmを測る。底面は平坦である。

ビットは12本検出された。P₁・P₂は主柱穴の一部としても良いが、全体の柱穴配置は明らかにできなかった。他のビットの大半は中世頃の所産と推定される。

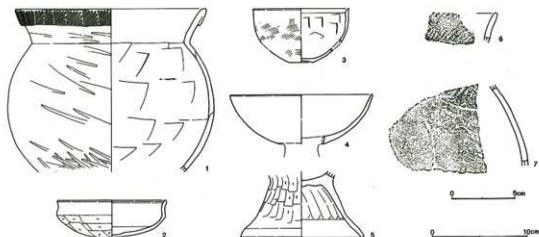
壁溝は部分的に残存する。おそらく本来は全周するものと思われる。

出土遺物は少ないがその大半は炉から北東壁にかけて検出されている。第296図1は広口壺で複合口縁の外面には縄文(単節LR)が横位に施文される。頸部から胴部にはヘラミガキ痕が残る。3は小形の鉢で、外面は二次被熱している。4は小形高杯の坏部であるが、風化により整形は不明瞭である。6は吉ヶ谷系甕の口縁部と思われるもので、外面はLRの単節縄文が横位に施文され、内面は横位のヘラミガキ調整が施されている。7は壺肩部片で残存部上端に縄文帯(単節LR)が巡る。2の比企型環は混入である。



第295図 C区第11号住居跡





第296図 C区第11号住居跡出土遺物

C区第11号住居跡出土遺物観察表(第296図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	広口壺	(20.0)	17.0		ABCE	B	橙	35%	No4~9,他 覆土(+13~19cm)
2	環	11.3	3.9		ABC	A	浅黄橙	55%	No5 覆土(+15cm) 赤彩
3	小形鉢	(10.0)	(5.6)	2.5	ABJ	B	にぶ黄	65%	No15 覆土(+9cm) 外面二次被熱
4	高環	(14.9)	5.2		AB	B	浅黄橙	15%	覆土
5	台付甕		6.9	12.5	ABC	A	にぶ黄	70%	No1 覆土(+13cm)
6	甕				ABC	B	にぶ黄		覆土
7	壺				ABC	B	黒褐		No16 覆土(+13cm)

C区第12号住居跡(第298図)

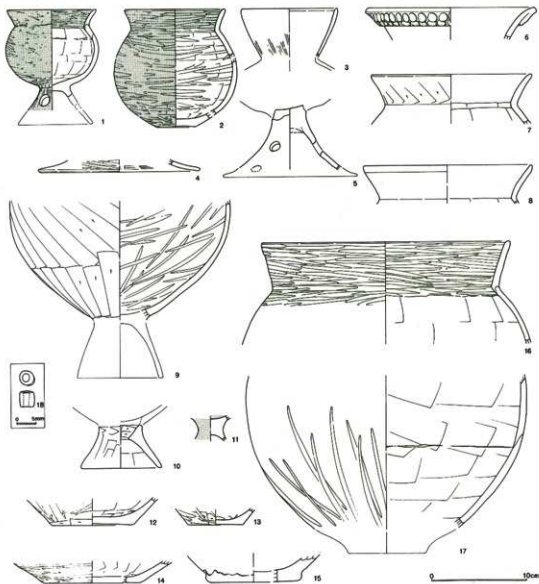
E・F-25・26区に位置する。北壁は第8・9号方形周溝墓と近接するが直接切り合い関係はない。西壁及び南壁は第61・62号住居跡と第8号溝跡によって覆土上部を破壊されているが、本住居跡の方が深いために床面は残存する。形態は方形を呈する。比較的大型の住居跡で規模は長軸6.30m、短軸6.20m、深さ25cmを測る。主軸方位はN-4°-Wを示す。

床面は平坦で全体に堅く締まっていた。覆土は黒褐色土で構成され、大きく第1層と第2・3層に分かれる。後者にはロームが多量に含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。

炉は住居中央部北寄りのP₁とP₄間に位置する。形態は楕円形で、規模は長径75cm、短径46cmを測る。底面は皿状に浅く凹んでいた。埋土には焼土が多量に含まれていたが、北半部は粘土で被覆さ

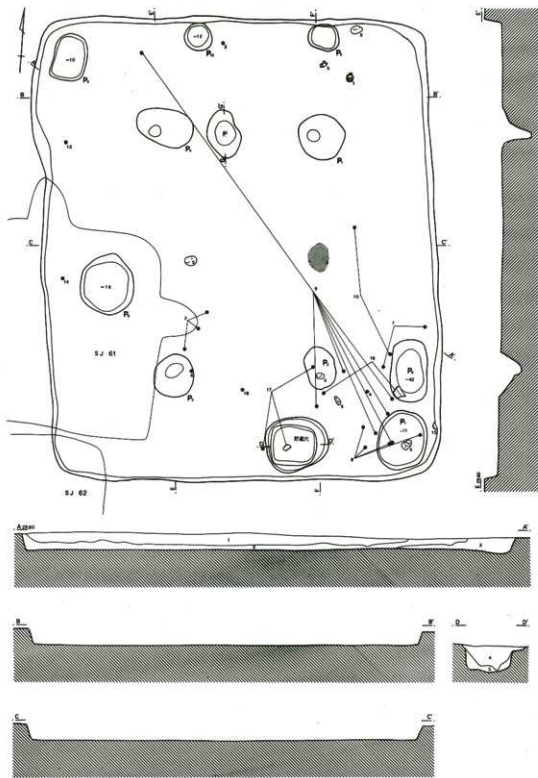
C区第12号住居跡出土遺物観察表(第297図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	脚付埴	9.2	10.5		ABC	B	にぶ黄	90%	No217 覆土(+7cm) 赤彩 小形
2	小形埴	10.4	(12.3)	4.0	ABC	B	浅黄橙	60%	No82~84 覆土(+2~6cm) 赤彩
3	埴	(10.0)	5.1		ABC	D	にぶ黄	15%	No21 覆土(+5cm)
4	高環		1.2	(16.6)	ABC	A	にぶ黄	5%	No164 覆土(+15cm) 無彩
5	高環		6.8		ABC	B	橙	60%	No218 床面
6	壺	(17.4)	3.4		ABJ	C	にぶ黄	15%	No128 覆土(+7cm)

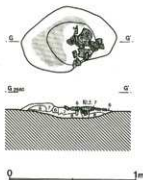


第297図 C区第12号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
7	甕	16.6	5.2		ABC	B	にぶい遣	50%	No180,190,他 覆土(+4~10cm)
8	甕	(17.4)	4.0		ABC	B	にぶい遣	20%	No169,177,他 覆土(+1~16cm)
9	台付甕		12.5		ABC	A	灰褐色	40%	No14,158,他 覆土(+1~10cm)
10	台付甕		4.5	(8.0)	ABC	A	にぶい遣	40%	No113,116 覆土(0~+6cm)
11	高環		2.6		ABC	B	にぶい遣	90%	覆土 小形
12	壺		2.8	(8.4)	ABC	A	にぶい遣	25%	覆土 底部木炭痕
13	壺		1.7	5.8	ABC	B	にぶい遣	95%	No8 覆土(+6cm)
14	壺		2.3	(10.0)	ABC	A	にぶい遣	25%	No49 床面
15	壺		2.8	(9.8)	AB	B	にぶい遣	25%	No200 覆土(+7cm)
16	広口壺	(26.0)	10.7		ABC	A	浅黄橙	30%	No166,199 覆土(+1~9cm)
17	壺		16.2		ABC	A	にぶい遣	25%	No210 貯穴(-32cm) 154,159 覆土



第298图 C区第12号住居跡



- 1 黒褐色土 炭化物なし。
- 2 黒褐色土 ソフトローム多量混入。
- 3 黒褐色土 ソフトローム多量混入、しまりあり。

貯穴

- 4 黒褐色土 シルト質、ロームブロック少量混入。
- 5 黄褐色土 シルト質、ソフトローム主体。

貯

- 6 赤褐色土 焼土ブロック密に含む。
- 7 黒褐色土 焼土ブロック混入。
- 8 黄褐色土 ソフトロームに焼土ブロック・炭化物混入。



0 2m

れていた。粘土自体が被熱して焼土化しており、粘土板炉と考えると良いものと思われる。また、 $P_1 \cdot P_2$ 間の床面に焼土が散布していた。特に掘り込みはなく副炉としてよいかどうかは明確ではない。

貯蔵穴は南壁直下の中央からやや東に寄った位置に設けられていた。基本形態は長方形であるが上部に浅いテラスをもつ。深さは40cm程で底面はやや凹凸がある。遺物の接合状況から見ても住居廃棄時には開口していたものと考えられる。

ピットは10本検出された。 $P_1 \sim P_4$ は深さ28~46cmで、規則的に配置されることから支柱穴と考えると良からう。 P_5 は床面を切って掘り込まれており後世の所産である。その他は深度も浅く柱穴としての機能は想定し難い。壁溝は確認されなかった。

出土遺物は少ない。第297図1は脚付甕で赤彩される。脚部透穴は3孔。6は複合口縁壺で複合部は指押さえされている。7の甕口縁はヘラケズリ後上半にヨコナデが加わる。9は台付甕と思われる。外面はヘラケズリ、内面は平滑でヘラミガキと思われる。16は大形の広口壺。口縁部はヘラミガキ、胴部は腐化により整形は不明瞭である。18はガラス小玉で、南壁近くの床面から出土した。長さ4.2mm、直径3.8mmで、径1.5~1.8mmの孔が貫通する。色調はライトブルーで半透明である。



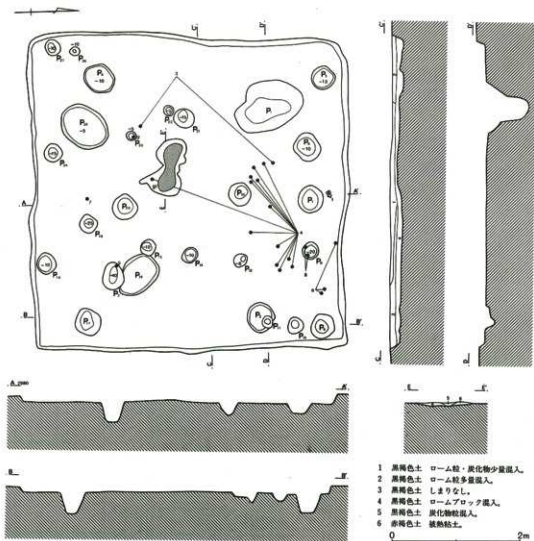
C区第13号住居跡(第299図)

H-26・27区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸5.00m、短軸4.90m、深さ約10cmを測る。主軸方位はN-89°-Wを示す。

床面は全面貼床され若干の凹凸をもつ。覆土は黒褐色土で構成されるが、堆積状況の詳細は不明である。

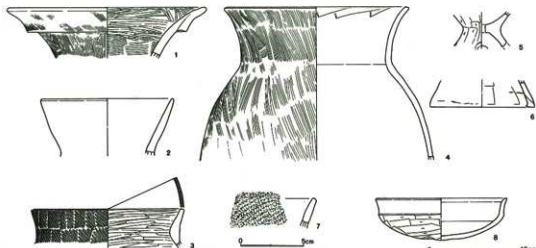
炉は住居中央から僅かに南西に寄った位置に設置される。中心部の捻れた瓢箪状のプランをもち、5cm程の厚さで粘土が貼られていた。上面は中央部が僅かに凹み炭化物混じりの黒褐色土が堆積している。粘土は全体が加熱し、焼土化していた。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは27本検出されているが、大半は後世の所産と推定され本住居に伴うものは明確にできなかった。P₁・P₃は主柱穴を構成するものとも考えられるが、4本主柱穴とすると対応する柱穴は確認されていない。壁溝は検出されなかった。



第299図 C区第13号住居跡

出土遺物は少ない。第300図1は複合口縁壺で外面刷毛目、内面はミガキ調整される。2は単口縁の埴と思われるが、風化しており整形不明。4は甕か。外面刷毛調整、内面の口縁部上端は篋状工具痕が残る。口唇端面は面取りされる。全体に風化が著しい。5は小形器台で、脚部透穴は4孔。3・7は吉ヶ谷系の甕と考えられる。3は口唇部と外面にRLの単節縄文を横位に施文。7はLRの単節縄文が横位に施文される。内面は何れも横位のヘラミガキ。8はP_上部から出土した坏で明らかに混入である。



第300図 C区第13号住居跡出土遺物

C区第13号住居跡出土遺物観察表(第300図)

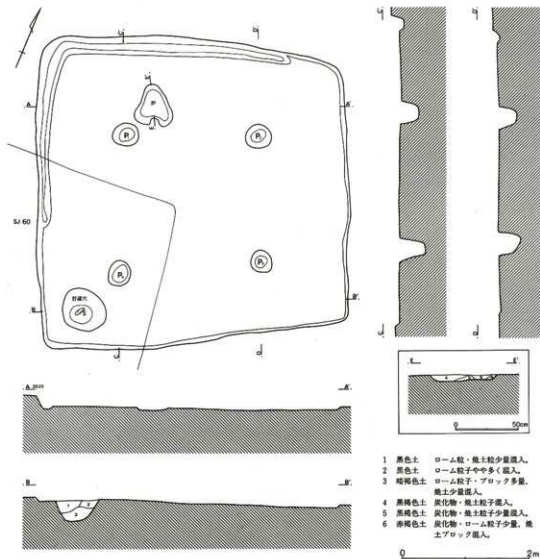
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(20.6)	5.3		ABC	A	橙	20%	Na9 覆土(+10cm) 無彩
2	埴	(13.7)	6.0		ABC J	B	浅黄橙	10%	Na59 床面
3	甕	(15.4)	4.1		ABC	B	にじみ青	20%	Na23,60 床面
4	甕	18.8	16.0		A B J	B	にじみ青	35%	Na18,26,他 覆土(0~+12cm)
5	小形器台		3.9		ABC	B	橙	80%	Na86 覆土(+5cm)
6	台付甕	2.8	(10.8)		ABC	B	橙	40%	Na39,40,91 覆土(0~+8cm)
7	甕				A J	B	灰褐		Na70 覆土(+7cm)
8	坏	(13.7)	4.4		ABCE	A	橙	45%	Na42 床面 無彩 混入

C区第14号住居跡(第301図)

K-24区に位置し、第60号先居跡に南西部を切られているが、本住居跡の方が深いために規模は確定できる。形態は方形を呈し、規模は長軸4.86m、短軸4.80m、深さは北西コーナー付近で20cmを測る。主軸方位はN-25°-Wを示す。

床面はやや凹凸があり全体に南東に向かって傾斜していた。覆土は焼土粒子とローム粒子を少量含む黒褐色土で構成されているが、南東側では覆土が殆ど残されておらず、堆積状況は明らかにできなかった。

炉は住居中央から北西に寄った位置に設けられる。いわゆる地床炉で、底面は皿状に5cm程掘り凹められ、埋土には焼土が多量に含まれていた。



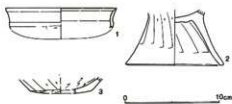
第301図 C区第14号住居跡

貯蔵穴は南西コーナー内側に設けられている。形態は楕円形を呈し、規模は長径72cm、短径62cm、深さ30cmを測る。覆土中からは棒状の礫が検出された。

ピットは4本あり、配置から何れも支柱穴と考えられる。住居の歪みに対応するかのようには形に配されている。

壁溝は北壁から西壁にかけて検出され、全周しない。

出土物は破片が数点出土したのみである。第302図1と3の甕は明らかな混入。2は台付甕脚部で、外面は弱いヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。



第302図 C区第14号住居跡出土遺物

- | | |
|--------|---------------------------|
| 1 黒色土 | ローム粒・焼土粒少量混入。 |
| 2 黒色土 | ローム粒子やや多く混入。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子・ブロック多量、
焼土少量混入。 |
| 4 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子混入。 |
| 5 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子少量混入。 |
| 6 赤褐色土 | 炭化物・ローム粒子少量、
焼土ブロック混入。 |

0 2m

C区第14号住居跡出土遺物観察表(第302図)

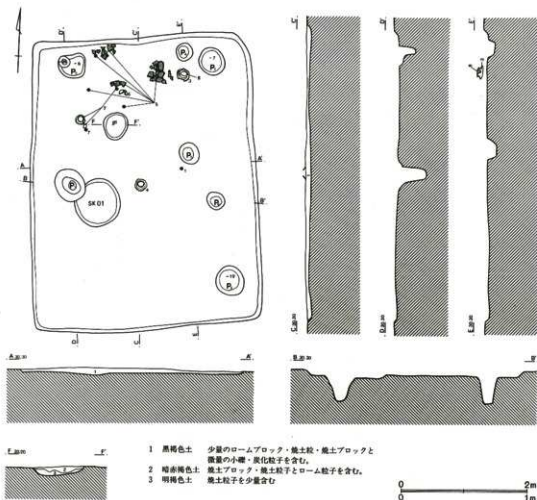
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.6)	2.2		ABC	A	にび橙	5%	覆土 赤彩
2	台付甕		5.8	9.8	ABC	B	浅黄橙	100%	No.1 床面
3	甕		1.7	(6.6)	ABJ	A	灰褐	20%	覆土

C区第15号住居跡(第303図)

F・G-21区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.60m、短軸3.60m、深さは5~10cmと全体に浅い。主軸方位はN-4°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土はローム・焼土混じりの黒褐色土単層で特に土層変化は観察されなかった。

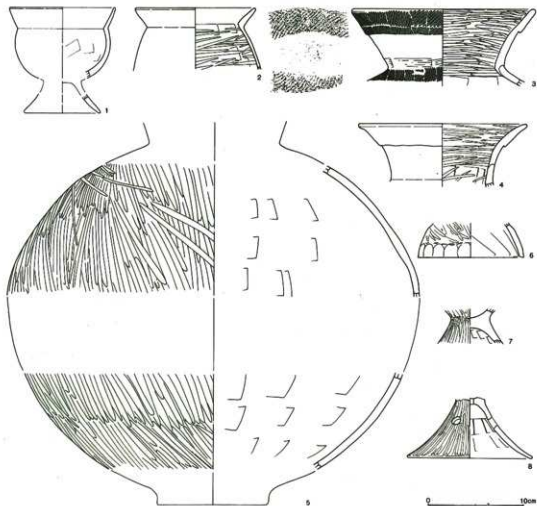
炉は住居中央からやや北西に寄った位置にある。形態楕円形を呈し、規模は長形42cm、短径36cmで、底面は7cm程皿状に掘り込まれ赤褐色に被熱していた。



第303図 C区第15号住居跡

貯蔵穴は認められなかった。ピットは住居内から7本検出された。P₀とP₁は深度が40cmを超え、支柱穴の候補となろう。土壌は1基(SK01)検出されたが住居の掘方かもしれない。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少ないが、炉の周辺から北壁よりにまとまっていた。ほとんどの土器が床面よりも数cm浮いた位置から出土している。第304図1は脚付甕でP₀脇から出土した。全体に風化しており調整は不明。2は小形甕か。外面は二次被熱を受け器面が剥落している。胴部内面はヘラミガキが施され平滑である。3・4は複合口縁の壺。3はP₁の西側から逆位で出土した。上部には8の小形器台が重なっていた。口縁部と肩部に縄文(単節LR)が横位に施文されている。4は住居中央部からやはり逆位で検出された。複合部の段は弱く口縁部は外反する。外面の調整は風化により不明。内面はヘラミガキされている。5は大形壺の胴部と底部片で、北壁周辺に散乱したような状態で出土した。胴部は球形を呈し丁寧なヘラミガキが施されている。8は小形器台で受け部を欠く。脚部透孔は3孔で中心部には小孔が貫通する。



第304図 C区第15号住居跡出土遺物

C区第15号住居跡出土遺物観察表(第304図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	脚付埴	(11.0)	(11.0)	(3.8)	ABCJ	B	橙	25%	No16,84,他 覆土(+2~8cm)
2	小形甕	12.5	6.4		ABCE	A	橙	80%	No48,81,83 覆土(+3~7cm)
3	壺	18.8	7.9		ABC	A	にぶ黄橙	90%	No74,76 覆土(+9cm) 無彩
4	壺	17.5	6.6		ABC	B	浅黄橙	90%	No96 覆土(+6cm)
5	壺		(31.8)		ABC	A	にぶ黄	35%	No27,28,他 覆土(+6~18cm) 無彩
6	台付甕		3.6	(11.0)	ABC	A	にぶ黄	20%	No53 覆土(+5cm)
7	高 环		3.7		ABC	A	橙	40%	No14 覆土(+5cm)
8	小形甕		6.3		ABC	A	にぶ黄	80%	No77 覆土(+14cm) 脚径(13.0cm)

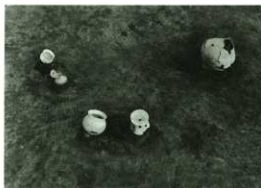
(2) 方形周溝墓

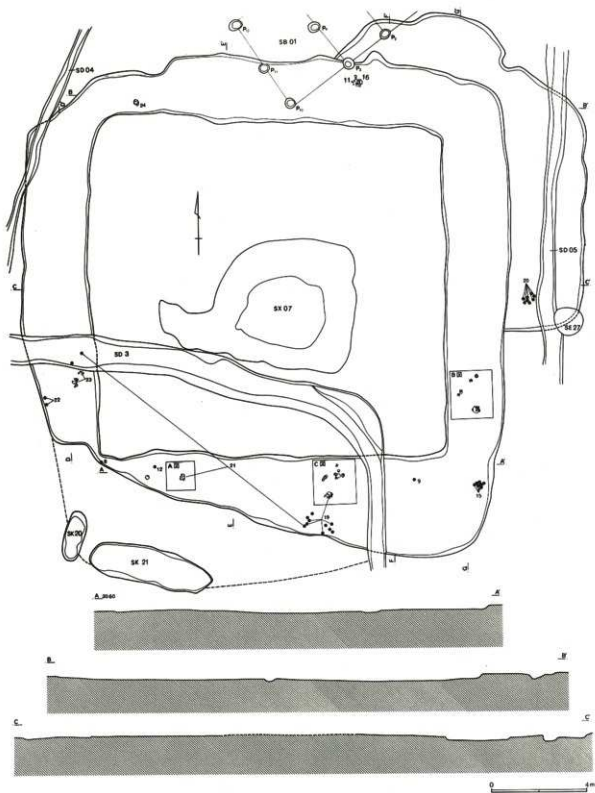
C区第1号方形周溝墓(第305図)

調査区西寄りのE-G-18~20区に位置する、C区で最大の規模を持つ周溝墓である。第1号掘立柱建物跡、石敷き状遺構(SX07)、第27号井戸跡、及び第3~5号溝跡の攪乱を受けていた。平面形態は周型で、方台部は東西に僅かに長い方形を呈する。方台部の規模は上面で東西長15.16m、南北長15.00m、主軸を北からの傾きに求めればN-2°-Eを示す。

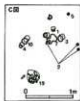
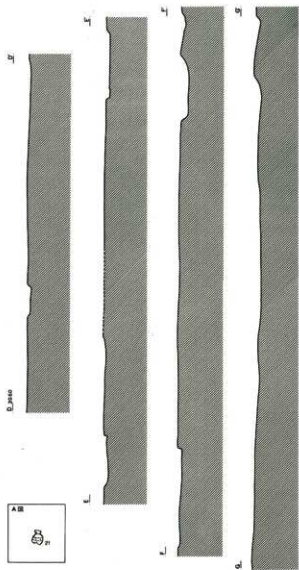
周溝は深さ50cmに満たず全体に極めて浅い。削平の影響もあろうが、溝外縁の形態はかなり乱れており、特に北溝から東溝にかけては2段に掘り込まれ外側は大きく膨らんでいた。逆に南西コーナーでは溝が途切れるかと思われる程幅を減じていた。しかし、周溝墓南側には浅い土壌(SK20・21)が位置し、後者からは古墳時代前期と考えられる壺底部等の土器片が検出されている。両者とも周溝墓覆土と近似しており、これらの土壌は周溝の一部の可能性がある。若し、そうであれば本来の周溝は現状よりも南側のSK21までは存在したことになる。

溝断面は総じて方台部側が垂直近く鋭く立上がり、外縁部は緩やかである。各溝の規模は、北溝が最大幅4.80m、深さ0.41m、東溝が最大幅6.08m、深さ0.38m、南溝が幅4.20m(SK21まで含めると5.80m)、深さ0.27m、西溝は幅2.85m、深さ8cmを測る。溝底面は比較的平坦で、境内土壌を思わせるような掘り込みは認められなかった。周溝覆土はロームブロックを含む黒褐色土を基調としていたが、深度が浅いこともあり堆積環境の詳細は明らかにできなかった。





第305图 C区第1号方形周溝基



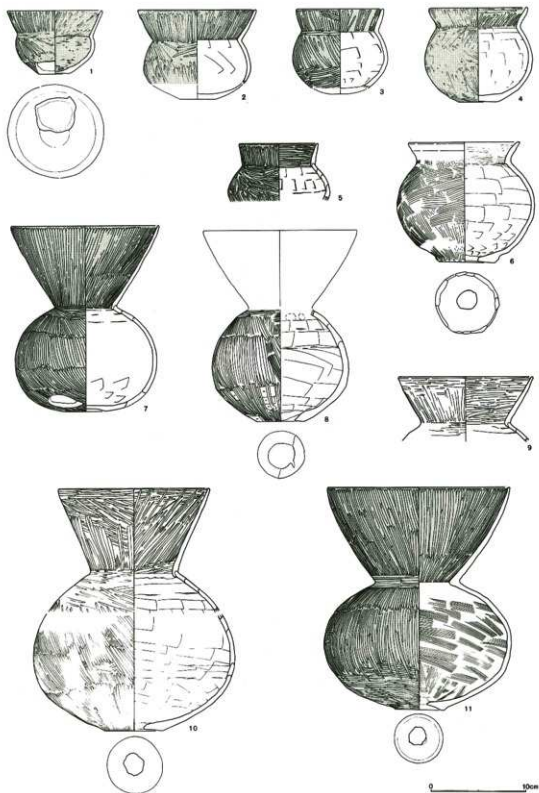
出土土器は比較的多い(第306~309図)。各溝から出土しているが、特に南溝と東溝からまとまって検出された。完形またはそれに近い遺物は方台部寄りの周溝下層に多く、接合関係も近接距離で結ばれる。唯一例外は第308図21の壺で、西溝の破片とかなり離れた南溝の破片が接合している。

第306図1は小形埴。底部は小さな平底をなし、焼成後の穿孔が認められる。6は刷毛目整形の小形広口壺。7~11は中形の埴で、7と11には口唇部内面は内削ぎ状となる。何れも底部または胴部下端に焼成後の穿孔が施される。

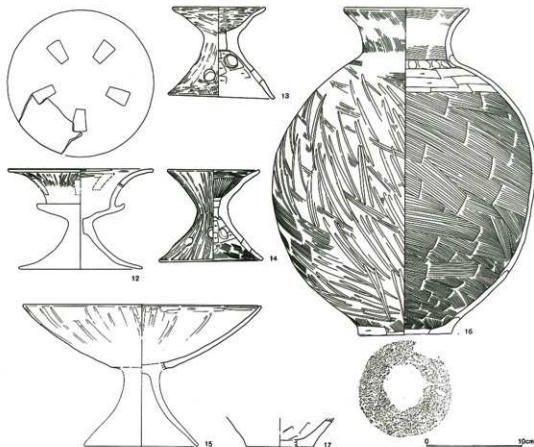
12は裝飾器台の口縁部片である。長方形の透穴が5孔程穿たれるものと思われる。

13・14は小形器台。「X」字状の形態で、口径と脚径の差は余りない。15は高環で、環部下端に弱い稜が認められる。

16~24は壺。16・18は単口縁の壺である。18は胴部が算盤玉形に大きく張り出す。19~21は口縁部に2及至3段の輪積痕を残す吉ヶ谷系の壺と思われる。口縁部は「く」の字に屈曲する。器形的には胴部が下膨れになるものと、卵形を呈するものがある。23は大形壺の胴部片で、上位に無区画の縄文帯(単節LR横位施文)を2段、帯状に巡らす。外面は縄文帯も含めて赤彩痕が残る。24も比較的大形の壺の範疇に入るであろう。幅広の複合口縁をなし、胴部は球形に大きく張る。口縁複合部には裝飾はない。



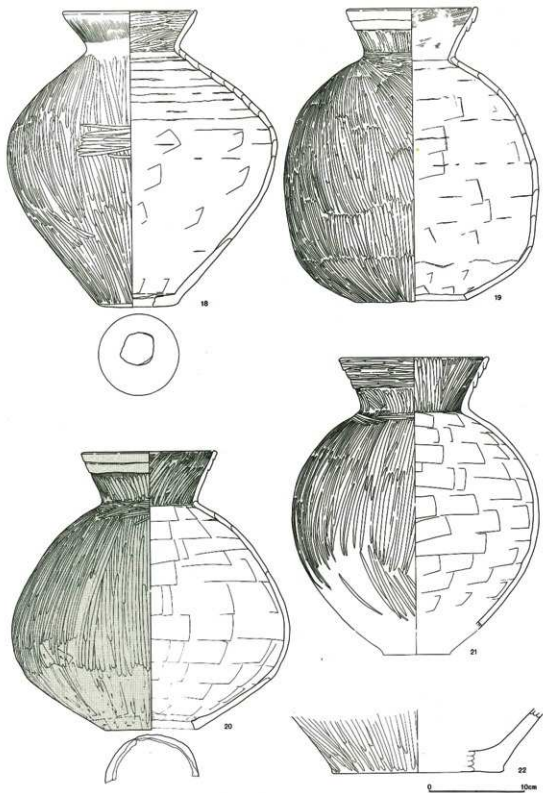
第306图 C区第1号方形周溝墓出土遗物(1)



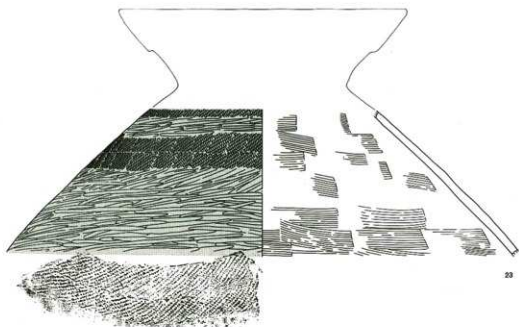
第307図 C区第1号方形周溝基出土遺物(2)

C区第1号方形周溝基出土遺物観察表(第306~309図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土構成	色調	残存	出土位置・その他
1	小形埴	12.5	7.6	3.1	ABC	A 浅黄橙	85%	No196 南溝覆土下層(+7cm) 赤彩
2	小形埴	(12.4)	7.7		ABCE	A におい黄	20%	No61, 63, 198 南溝覆土(+18cm)
3	小形埴	9.1	8.3		ABC	A 橙	50%	No199 南溝覆土下層(+9cm) 赤彩
4	小形埴	10.0	9.8	3.8	ABC A	A 橙	80%	No193 南溝埴底(+3cm) 赤彩
5	小形埴	(8.2)	6.0		ABC A	A におい黄	20%	No172 南溝覆土下層(+8cm) 赤彩
6	小形壺	11.4	12.6	5.8	ABC	B 橙	90%	No205, 207 東溝覆土(+7~20cm) 無彩
7	埴	15.5	19.4	(3.8)	ABE	A 橙	50%	No198 南溝覆土下層(+6cm) 赤彩
8	埴		11.7	(5.0)	ABC A	A 橙	40%	No166 南溝埴底
9	埴	(14.0)	6.8		ABC J	A 橙	30%	No201 南溝覆土(+18cm) 赤彩不明
10	埴	(15.8)	25.4	5.8	ABC	A 浅黄橙	50%	No179, 194 南溝覆土下層(+5cm)
11	埴	19.0	23.3	3.2	ABC	A 浅黄橙	80%	No216 北溝覆土上層(+30cm) 赤彩
12	裝飾器台	(15.0)	2.0		ACE	A におい黄	15%	No38 南溝覆土(+20cm)
13	小形器台	9.6	9.6	11.0	A J	B 浅黄橙	90%	No204 東溝覆土(+20cm) 赤彩
14	小形器台	9.5	9.7	(10.6)	ABC	A 浅黄橙	60%	No206 東溝覆土下層(+5cm) 赤彩
15	高 环	(25.0)	6.7		ABC J	C におい黄	45%	No95他 東溝覆土下層(+5~7cm) 赤彩
16	壺	12.9	34.4	9.7	ABC J	A 浅黄橙	70%	No216 北溝覆土上層(+30cm)
17	壺		3.1	6.8	ABC	B 橙	20%	南溝覆土
18	壺	14.8	31.0	8.8	ABC J	B におい黄	85%	No202 南溝埴底



第300图 C区第1号方形周满墓出土物(3)



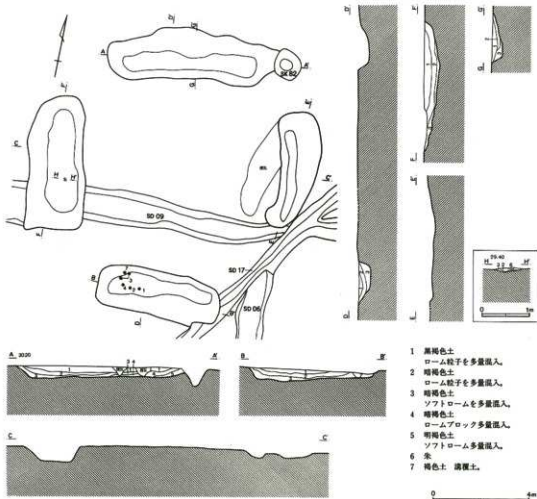
第309图 C区第1号方形周溝墓出土遗物(4)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
19	壺	13.1	30.7		ABC	A	橙	70%	No182他 南溝覆土下層(+2~7cm) 無彩
20	壺	13.5	29.1	9.8	ABC	B	にぶい橙	60%	No9, 23他 東溝墳底 赤彩
21	壺	(15.2)	28.5		ABC J	B	浅黄橙	40%	No180他 南溝覆土(+8~17cm) 無彩
22	大形壺		6.6	(18.0)	ABCE	A	にぶい橙	25%	No214, 215 西溝墳底
23	大形壺		15.5		ACE	A	橙	25%	No211, 212 西溝下層(+1~8cm)
24	壺	22.8	44.0	12.0	ABC	B	浅黄橙	60%	No208 北溝下層(+5cm)

C区第2号方形周溝墓(第310図)

調査区中央部北縁のD・E-23・24区に位置する。西側に第7号方形周溝墓が近接し、東溝は、10号方形周溝墓と接する。溝覆土上層は部分的に土塊と溝跡の攪乱を受けていた。平面形態は四隅切れで、方台部はほぼ方形を呈する。規模は方台部上面で南北長、東西長共に8.20mを測る。主軸方位はN-8°-Wを示す。

各溝の規模を列举すると、北溝は東端部を土塊に破壊されており、残存長9.10m、幅2.15m、深



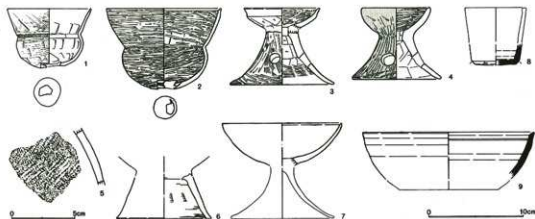
第310図 C区第2号方形周溝墓

さ0.45m、東溝が長さ5.00m、幅1.68m、深さ0.38m、南溝が長さ5.25m、幅1.82m、深さ0.50m、西溝が長さ5.68m、幅2.40m、深さ0.64mを測る。周溝は楕円形を基調としているが、方台部側が比較的直線的で、外縁部がやや膨らむ傾向にある。但し、東溝は方台部側にやや挟れていた。断面は方台部側が鋭く立上がり、外縁部の立上がり角度は緩く、底面は小さな凹凸をもつが基本的には船底状を呈する。南溝は東側に開き気味で、結果的に東南の陸橋部が最も広がっている。

溝覆土は暗褐色土をベースとしていた。北溝では不明な点があったが、方台部からの崩落土(第3層)が概ね1次堆積土となる模様である。全体にロームブロックの混入が目立った。また、西溝の第2層上面から朱が検出されている(第6層)。

出土土器は南溝西寄りに集中する。凡そ第3層上面付近から出土しており、方台部から転落した可能性が高いものと推定される。

第311図1・2は小形埴でどれも底部は焼成後の穿孔がなされる。1は体部外面は木口状工具によるナデ後、部分的にミガキが加わる模様であるが風化により不鮮明。赤彩も不明。2は全面ミガキ調整で赤彩されない。3・4は小形器台で、3は口縁が屈曲して立上がる。4は分厚な作りである。どれも脚部は3孔の透穴が穿たれる。5は吉ヶ谷系甕の胴部片で外面LRの単節縄文が施文され、内面は横方向のヘラミガキ。6は台付甕底部片で風化している。7は小形高環で脚部を欠く。風化著しく整形不明。8・9は南溝覆土から出土した須恵器で混入。



第311図 C区第2号方形周溝墓出土遺物

C区第2号方形周溝墓出土遺物観察表(第311図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小形埴	8.6	6.2	2.8	ABC	C	浅黄橙	100%	No1 南溝覆土下層 赤彩不明
2	小形埴	12.0	8.4	2.4	ABC	A	にぶい橙	100%	No2 南溝覆土中層 全面ミガキ
3	小形器台	(7.9)	8.0	(10.6)	ACJ	B	にぶい黄	45%	No4 南溝覆土上層 赤彩不明
4	小形器台	7.0	7.5	9.2	ABC	A	橙	95%	No3 南溝覆土上層 赤彩
5	甕				AC	A	にぶい橙		南溝覆土
6	台付甕		4.7	(9.8)	ACE	B	黄橙	20%	南溝覆土
7	高環	12.5	4.5		AIJ	C	橙	80%	No5 南溝覆土上層
8	弁形土器		2.2	(4.3)	ABC	A	灰	40%	南溝覆土
9	椀	(18.0)	4.9		ABC	B	灰	10%	南溝覆土

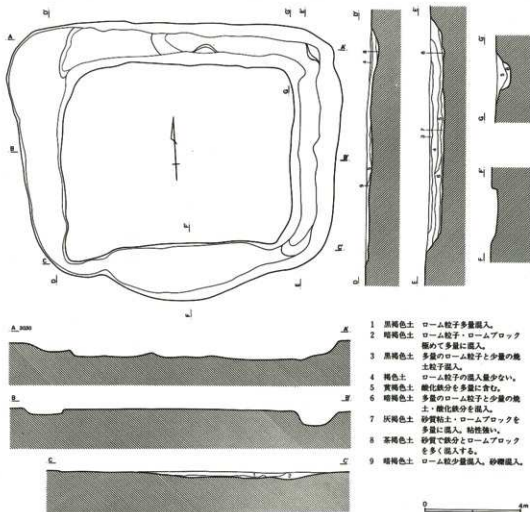
C区第3号方形周溝墓(第312図)

C区北西端部のD・E-15・16区に位置し、南西側に第5号方形周溝墓が近接する。平面形態は全周型で、方台部は東西に長い長方形を呈する。方台部の規模は東西長9.68m、南北長7.48m、主軸方位はN-3°-Eを示す。

周溝は南溝中央が外側に張り出し、南西コーナーが幅を急激に減ずる。底面は東溝から北溝にかけて一段深く掘り込まれ、南西コーナー部が浅い。周溝の深さは北溝が0.80m、東溝が0.60m、南溝が0.32m、西溝が0.36mを測る。北溝及び東溝の肩部は崩壊したようなカット面が認められ、墳底部の立上がり角度は内壁側、外壁側共に比較的急である。

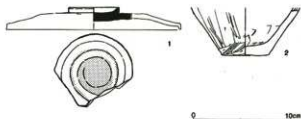
覆土は黒褐色土及び暗褐色土を基調とする。東溝下層にはロームブロックと酸化鉄分が多く含まれており、方台部側からの堆積が主体であったものと推定される。一方、溝深度の浅い南溝と西溝では基底部の砂礫が浮き出していたが、堆積環境そのものは明瞭に把握できなかった。

出土土器は極めて少ない。第313図1は須恵器蓋で混入品である。残高1.4cmで胎土に白色針状物



第312図 C区第3号方形周溝墓

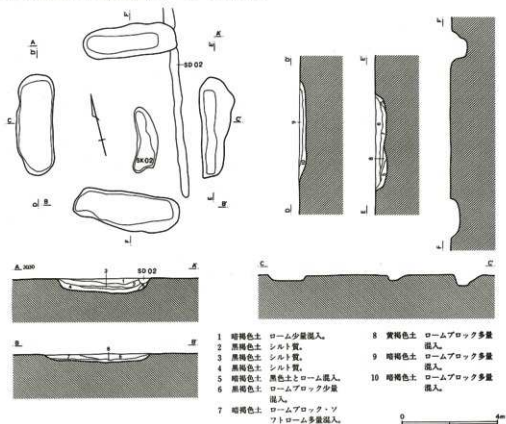
質を含む。灰色を呈し、焼成は普通。80%残。周辺部を二次的に打ち欠いて整えている。内面は磨滅しており、硯に転用された可能性がある。2は壺底部片。残高5.0cm、底径5.0cm。胎土に石英、白色粒子、白色針状物質を含む。浅黄橙を呈し、焼成は良好。50%残存。外面はヘラミガキ後ミガキ痕が認められる。周溝覆土から出土したが、正確な位置は不明である。



第313図 C区第3号方形周溝墓出土遺物

C区第4号方形周溝墓(第314図)

調査区北西部のD・E-17-18区に位置し、南西に存在する第1号方形周溝墓とは4.5m程離れている。周溝墓上面を第2号溝跡が貫流し、方台部上には第2号土壌(倒木痕か)が掘り込まれていた。平面形態は四隅切れのタイプに属し、南北の周溝が東に向かってやや開き気味となるために、方台部は台形を呈する。方台部の規模は南北長5.68m、東西長6.32mを測り、規模としては最も小さい一群に分類される。主軸方位はN-13°-Eを示す。



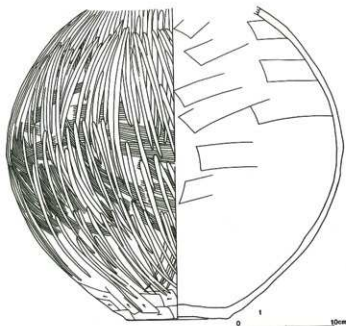
第314図 C区第4号方形周溝墓

周溝は楕円形を基調としているが、方台部側が比較的直線的で、外縁部が僅かに膨らむ傾向にある。各溝の規模は、北溝が長さ3.96m、幅1.36m、深さ0.68m、東溝が長さ4.24m、幅1.48m、深さ0.40m、南溝が長さ4.48m、幅1.64m、深さ0.44m、西溝が長さ4.24m、幅1.56m、深さ0.32mを測る。溝の横断面形は方台部側が鋭く立上がり、外縁部の立上がり角度は緩い。溝の縦断面形は基本的に船底状を呈し、墳内土壌は認められなかった。陸橋部の間隔は方台部の歪みにも関わらず1.6m～1.8mとほぼ均等である。

溝覆土は暗褐色から黒褐色を呈するシルト質土を基調とし、方台部盛り土に由来すると思われるロームの混入が比較的目立つ。南溝と東溝の堆積土はほぼ対応するが、北溝では一次堆積土(第5層)以外ではロームの混入が少なく、堆積環境が若干異なる模様である。

出土遺物は壺が1点検出されたのみである。

第315図1は壺で口縁部が欠いている。残存高は32.6cm、底径10.5cmで、胎土に石英、白色粒子、白色針状物質を含む。ふい橙色を呈し、焼成は普通。60%残。調整は胴部外面刷毛目調整後ミガキ、下端はヘラケズりされる。内面ヘラナデ。溝覆土から検出されたが、出土位置の詳細は不明。



第315図 C区第4号方形周溝墓出土遺物



C区第5号方形周溝墓(第316図)

調査区西端部のF・G-16・17区に位置する。北西側に第3号方形周溝墓が近接し、東側に所在する第1・13号方形周溝墓からは14mほど隔たっている。北溝では第2号住居跡と重複し、調査によって本周溝墓の方が新しいことが判明した。また、第15・16号井戸跡、第4号土壌、及び第1号溝跡の擾乱を受けていた。

形態は全周型で、方台部は東西に長い長方形を呈する。方台部の規模は東西長13.56m、南北長

11.20mを測り、C区の周溝墓の中でも第1号・11号周溝墓に次ぐ大形の一群に属する。主軸方位はN-11°-Eを示す。

周溝は方台部側では直線的であるが、北溝では大きく外に張り出している。南溝でも西端が幅広く、東端で窄まっていた。西溝と東溝の外縁は比較的直線的であるが、コーナ一部は何れもやや幅を減じている。しかしながら、周溝の深度は全体に浅く、現状の形態が本来の形状をそのまま反映しているとは限らない点は注意を要するであろう。

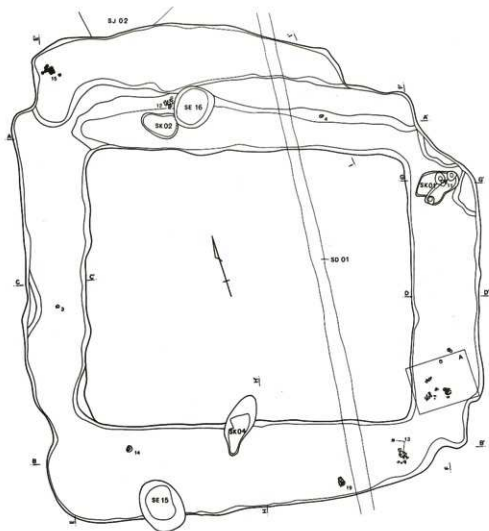
各溝の概要を示せば、北溝は最大幅4.28m、深さ0.35mで、底面は北側に向かって緩やかに浅くなる。東溝は最大幅3.08m、深さ32cmで、底面は比較的平坦である。南溝は最大幅4.12m、深さは方台部直下で0.40m、西溝は最大幅2.80m、深さ0.30mを測る。各溝の断面は何れも方台部側が鋭く、外縁部側が緩やかに立上がる通常の形態である。また、壙内土壌と言えるほど明確なものではないが、東溝の北寄り位置から3基の小ピットを伴う不整形の凹み(SK01)が検出された。SK01の壙底からやや浮いた位置からは第318図11の壺が横倒しの状態で出土した。

周溝覆土は基本的に6層に分かれる。第2・3層はロームの混入量が多いこと、また方台部側に厚く、外縁部側に薄く堆積していたことから方台部盛土に由来する第一次堆積土と考えられる。その後、4～6層の堆積を経て、周溝のほぼ全体にわたって第1層が覆ったものと理解される。第7層は後世の掘り込み(SK02)埋土である。

土器の出土状態を概観すると、各溝から散在的に出土する中において特に東溝南端付近に埴や器台、高坏等の小形土器群がまとまって検出された。壙底直上から出土するもの(第317図1・7・8・第318図17)と若干浮いたレベルから出土するもの(5・9・10)がある。方台部からの転落とすれば、埋没初期段階のものであろう。

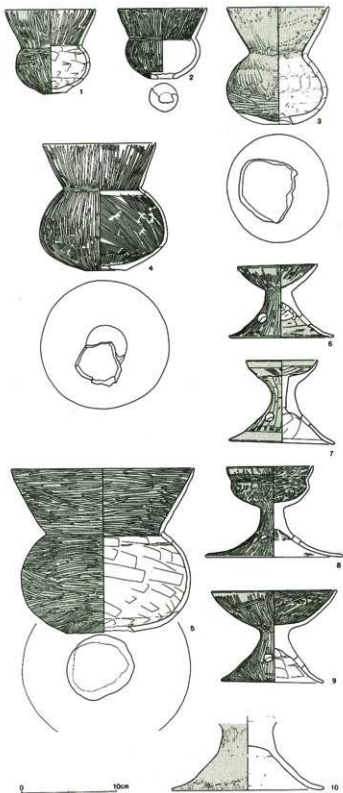
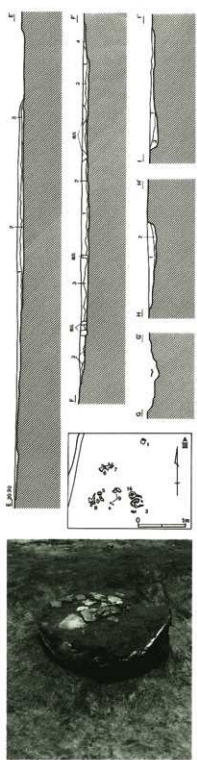
出土土器(第317～319図)は小形の埴(1～5)、小形器台(6・7)、脚付埴(8)、高坏(10・17)、小形高坏(9)、壺(11～14・16・19)、甕(15)、台付甕(18)で構成される。第317図1～5は埴で、1を除いて底部に焼成後の穿孔がなされる。6・7は小形器台、8は脚付埴で脚部は大きく開く。11・12は二重口縁壺で擬口縁部の張り出しが短い点特徴的である。12の底部は焼成後の穿孔が施される。11についてもその可能性がある。15は吉ヶ谷系の甕である。北溝西端部から出土した。底部は故意に打ち抜かれた可能性がある。外面口縁部から胴部最大径までは縄文(単筋LR)が横位に施文されるが、頸部付近は二次被熱を受け、器壁が剥離しているために縄文は不明瞭である。胴部下半はへ



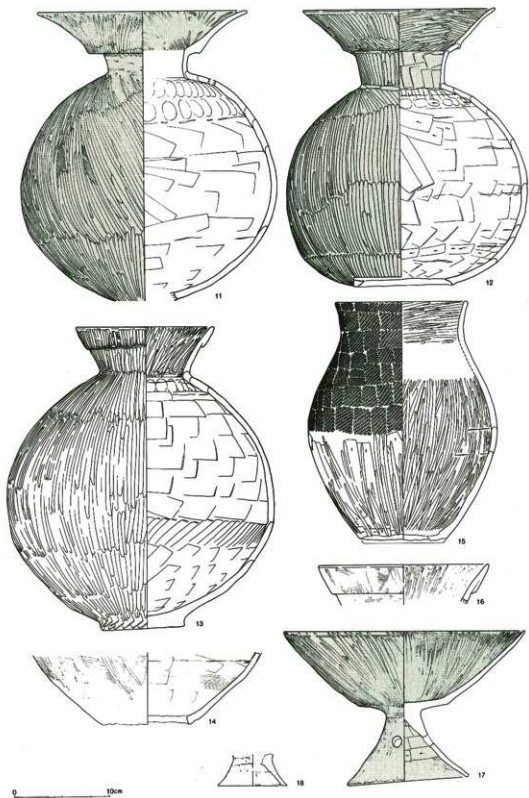


- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒と少量の小礫混入。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量混入。やや軟質。
- 3 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に混入。
- 4 暗褐色土 多量のロームブロックと少量の焼土粒子混入。
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量に混入。
- 6 暗褐色土 ローム粒子とロームブロック混入。軟質。
- 7 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック混入。

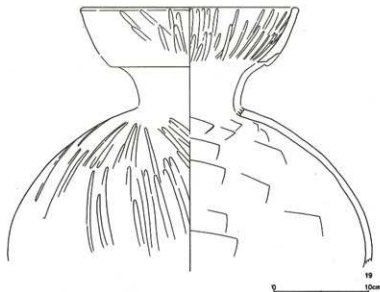
第316図 C区第5号方形周溝墓



第317图 C区第5号方形周溝墓出土物(1)



第318图 C区第5号方形周满墓(2)



第319図 C区第5号方形周溝墓(3)

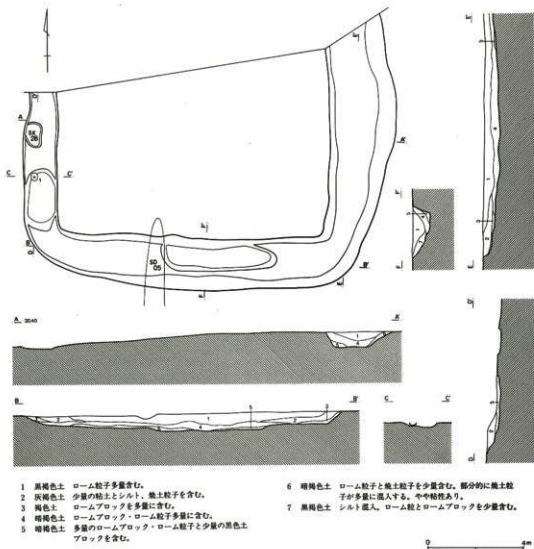
ラケズリ後ミガキ。内面は口縁部が横方向のミガキ、胴部は縦方向のミガキが施される。内面頸部の調整は器面が剥落しているために不明である。17は元屋敷系高坏に類似する。大きく開く坏部に比して小さい脚部がつく。19は幅広の複合口縁をもつやや大形の壺で頸部を欠く。口縁部は内湾気味に立上がる。口縁部と胴部は接合しない。

C区第5号方形周溝墓出土遺物観察表(第317~319図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小形埴	9.4	8.9	2.4	ABC	B	明黄褐色	95%	Na11 東溝墳底 外面のみ赤彩痕残る
2	小形埴	9.3	7.3	1.5	ABC	A	浅黄褐色	70%	南溝覆土 重複するSE15内に混入
3	小形埴	10.6	11.3		ABC	A	褐色	95%	Na15 西溝覆土(+8cm) 赤彩
4	小形埴	11.8	13.3	4.3	ABC	B	褐色	75%	Na14 北溝覆土(+12cm)
5	小形埴	19.2	17.2		ABC	A	浅黄褐色	65%	Na9 東溝墳底(+2cm) 赤彩
6	小形臺台	8.2	7.7	10.5	ABC	B	浅黄褐色	100%	Na4 東溝墳底
7	小形臺台	7.3	8.9	10.6	ABC	B	浅黄褐色	95%	Na7 東溝墳底 赤彩
8	脚付埴	9.1	9.5	14.2	ABC	B	にぶい黄褐色	95%	Na8 東溝墳底 赤彩痕残る
9	小形高坏	13.0	9.7	10.5	ABC	A	浅黄褐色	70%	Na5,6 東溝下層(+7cm) 赤彩
10	高坏		7.7	15.8	ABC	A	にぶい黄褐色	80%	Na10 東溝下層(+3cm)
11	壺	21.6	30.3		ABEJ	B	黄褐色	35%	Na13 東溝覆土下層(+5cm) 赤彩
12	壺	30.0	29.0		ABCE	B	浅黄褐色	90%	Na21 北溝墳底
13	壺	14.4	31.7	8.5	ABCE	B	浅黄褐色	60%	Na18,19 南溝下層(+3cm)
14	壺		7.4		ACE	A	浅黄褐色	95%	Na16 南溝覆土下層(+6cm)
15	甕	(13.8)	25.1		ABC	B	浅黄褐色	60%	SJ02-Na7他 南溝覆土下層(+10cm)
16	壺	(17.6)	4.1		ABC	A	浅黄褐色	20%	覆土
17	高坏	25.2	16.2	12.7	ABC	A	褐色	80%	Na2 東溝墳底 全面赤彩と思われる
18	台付壺		3.3	7.2	ABC	A	褐色	45%	西溝覆土
19	大形壺	(22.0)	27.2		A EJ	C	にぶい黄褐色	15%	Na17 南溝覆土下層(+6cm)

C区第6号方形周溝墓(第320図)

台地縁辺のD・E-20・21区に位置し、東側に第7号、南西側に第1号、南東側に12号の各周溝墓が近接する。方台部西半から西溝にかけては上面が後世の削平を受け、また南溝上面を南北に延びる第5号溝跡に切られていた。北壁は調査区外に延びるため、正確な形態は不明とせざるをえないが、おそらく全周型になるものと思われる。方台部は方形または長方形となろう。方台部の規模は東西

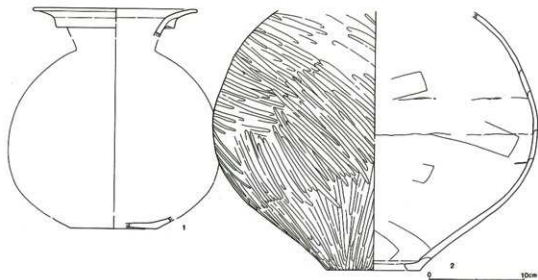


第320図 C区第6号方形周溝墓

長11.40m、南北残存長7.80mを測る。主軸方位はN-3°-Wを示す。

周溝は方台部側ではほぼ直線的であるが、南溝と東溝の外縁部は中央が膨らみ気味になる。東溝は最大幅2.80m、深さ0.60mで、底面は中央部に向かって僅かに深くなる傾向にあるが、全体的には比較的平坦である。南溝は最大幅2.12m、深さ0.50mで、中央部方台部寄りの底面には長径4.96m、深さ25cmほどの長楕円形の土塊が検出された。土層の堆積状況を見る限り、特に墳内埋葬を思わせるような点は認められなかった。西溝は幅1.40m、削平のため確認面からの深さは0.20mと浅い。外縁部寄りに後世の土壌が1基(SK28)掘り込まれていた。南西コーナー近くの底面には土塊状の凹みか検出され、底面直上には壺下半が据えられたかのような状況で残されていた。周溝の断面形は基本的に共通し、方台部側の立上りは鋭く、外縁部側では緩やかであった。

各周溝の堆積状況は基本的にはほぼ類似した様相を示し、第4層・5層といった方台部側からの埋



第321図 C区第6号方形周溝墓出土遺物

没が優勢で、外縁部からの流入土はさほど多くはない。その後、ローム粒子混じりの黒褐色土(第1層)が堆積したものと考えられるが、第1層としたものでも地点によって色調やロームの含有量等、若干の相違点も観察された。

出土土器は極めて少なく図化可能なものは西溝から2点検出されたに留まる。第321図1は有段口縁の壺で口縁部と底部片が出土したが胴部を欠く。口縁部は大きく開き、頸部との境に粘土を貼付し、外見上は二重口縁風に仕上げている。推定口径17.2cm、胎土に石英、白色粒子と砂粒を含み、焼成は普通。色調は橙色を呈し、口縁の10%程が残存する。風化により調整は不明。

2は西溝の墳底から掘えられたような状態で出土した。口縁部は削平により失われたものと推定される。胴部中位が強く影らむ壺形土器で、外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整される。底部は中心部に孔が開き、おそらく焼成後に穿孔されたものと推定される。器高27.1cm、底径9.7cmで胎土に石英、白色粒子、白色針状物質を含む。焼成はやや甘い。色調は浅黄橙を呈し、約40%が残存する。注記No 1。

第7号方形周溝墓(第322図)

台地北縁のC-E-21~23区に位置する。西側に第6号、東側に第2号周溝墓が近接する。第33号住居跡、第23号井戸跡、第9号溝跡と第42号土壌によって南溝を攪乱されていた。北西コーナー付近が調査区外に延びるため完掘できなかったが、形態は全周型と見てよい。方台部は東辺でやや内側に捻れるもののほぼ方形を呈し、規模は東西長11.40m、南北長10.44mを測る。主軸方位はN-1°-Eを示す。

周溝外縁部は北溝と西溝が比較的直線的であるのに対し、東溝と南溝が外側に影らんでいるために、全体的に見ると隅丸方形に近いプランをもつ。北溝は最大幅2.56m、深さ0.65mを測り、底面は中央から東側が一段深く掘り込まれていた。東溝は最大幅3.12m、深さ0.55m、底面は概ね平坦

であるが、北端部が深く掘り込まれる。南溝は最大幅2.92m、深さ80cmを測り、底面は中央部に向かって船底状に深くなっていた。西溝は最大幅2.65m、深さ0.56mで底面は緩やかな起伏をもち一定しない。溝の上立がりは総じて急角度であるが、方台部側の方がより直線的である。

周溝の堆積土は基本的に9層に分かれる。方台部からの流入土が主体となる模様で(第2・4~6・8層)、全体にロームの混入が目立った。東溝に於ける第1層の堆積土がほぼ底面まで達していることから見ると、確認面まで埋没する期間は比較的短かったものと推定される。第10層はSD09埋土で、南溝上を縦断していた。

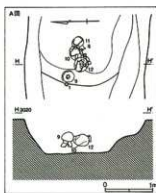
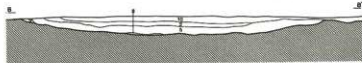
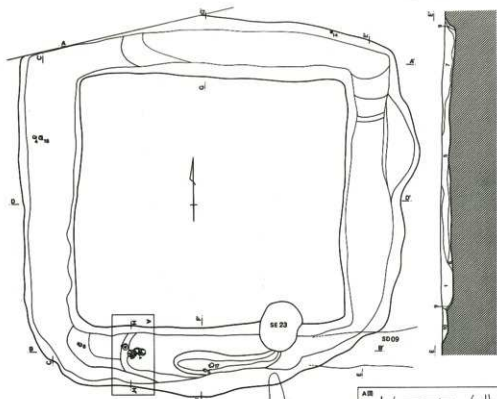
出土土器は各溝から出土しているが、量的にはさほど多くはない。その中にあって、南溝西寄りの第5層中に壺4個体と鉢がたかま方台部から転落したような状況でまとまって出土した。また、その西側、南西コーナー底面にも壺が横転した状態で残されていた。

出土土器は鉢、小形埴、埴、壺、高杯、甕、台付甕から構成される(第323・324図)。1の鉢は底部全体を欠き、故意に打ち欠かれた可能性がある。4は平底の埴か。5は長胴気味の小型甕。6の甕は頸部に凸帯が巡り、その凸帯上に刷毛原体と思われる櫛歯状工具で刻み加えられる。焼成が極めて良く、白色針状物質が含まれないことから非在地産の可能性もある。7は小形の二重口縁壺で底部を欠く。丁寧な作りの土器で、口縁端部は面取りされる。胴部下半には焼成後に穿たれた小孔が1か所認められた。9は大形の埴で、底部は焼成後に穿孔されている。10は器形的には東海西部系二重口縁壺の系譜を引くものと思われるが、無文化している。口唇部は平坦面を持ち、端部は上方に積み上げられている。11は幅狭の複合口縁壺で、複合部は指頭による押捺後、ヨコナデされる。下膨れの器形を呈する。12は単口縁の壺でやや長胴気味である。壺類は全て底部全体、または中心部を欠いており、故意に打ち抜かれたものと考えられる。

13は吉ヶ谷系の甕である。底部は焼成後の穿孔が施されている。南溝中層から出土した。口縁部から胴部上位と口唇部には極めて粒の粗い縄文(単節LR)が施文されるが、隙間が空く部分が存在する、あるいは施文方向が斜めになる箇所が見られる等、施文は雑である。胴部中位以下はヘラナデ後幅広のヘラミガキが縦方向に施され、内面は基本的にはヨコ方向のヘラミガキ調整される。14は口縁と底部を欠くため正確な器形は不明であるが、プロポーションや胴部下半の窄まり方から見て台付甕になる可能性がある。外面は刷毛目調整後、胴部上半に附加条縄文が横位に施文されている。附加条はR(1+1)+Lである。内面はヨコ方向のヘラミガキ後、下半には縦方向のミガキが加えられている。通常の刷毛目調整台付甕と比較すると調整技法は大きく異なり特異な土器である。22~24は混入と考えられる。22は土師質の皿である。

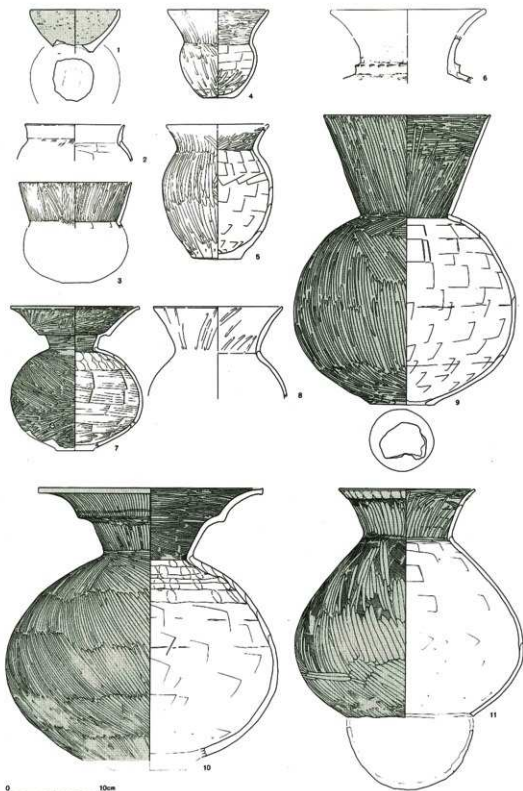
25~28は吉ヶ谷系の甕と思われる。外面はLR、またはRLの単節縄文、内面ヨコ方向のヘラミガキが施される。



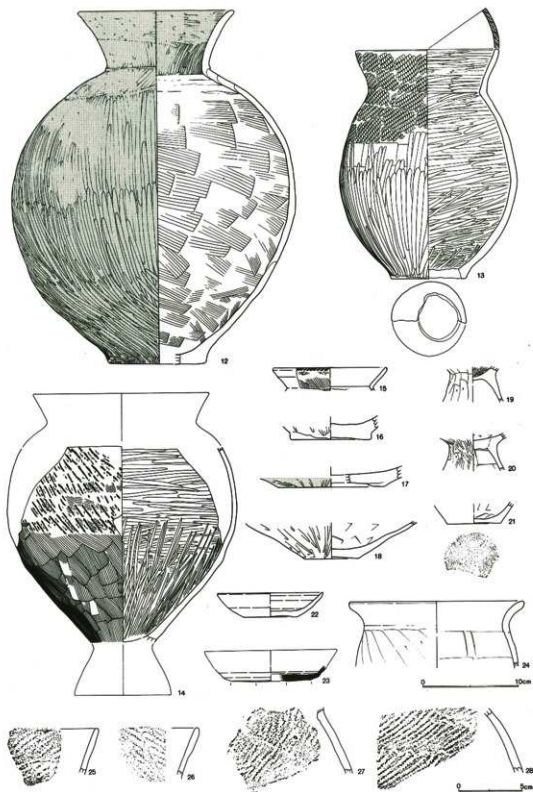


- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色土 焼土粒霑り状に混入。少量のローム粒と多量の砂礫を含む。</p> <p>2 暗褐色土 多量のローム粒子・砂礫混入。</p> <p>3 暗褐色土 焼土粒と多量のロームブロック混入。</p> <p>4 黒褐色土 ローム粒子を霑り状に含む。</p> <p>5 黒褐色土 多量のローム粒子、ロームブロック混入。</p> <p>6 暗褐色土 多量のローム粒子、ロームブロック混入。</p> | <p>7 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子微量混入。ロームブロック部分的に含む。</p> <p>8 褐色土 ロームブロック多量混入。</p> <p>9 暗褐色土 焼土粒子とローム粒子を少量含む。</p> <p>10 灰褐色土 ローム粒少量混入。</p> |
|--|---|

第322図 C区第7号方形周溝基



第323图 C区第7号方形周满墓出土遗物(1)



第324图 C区第7号方形周溝基出土物(2)

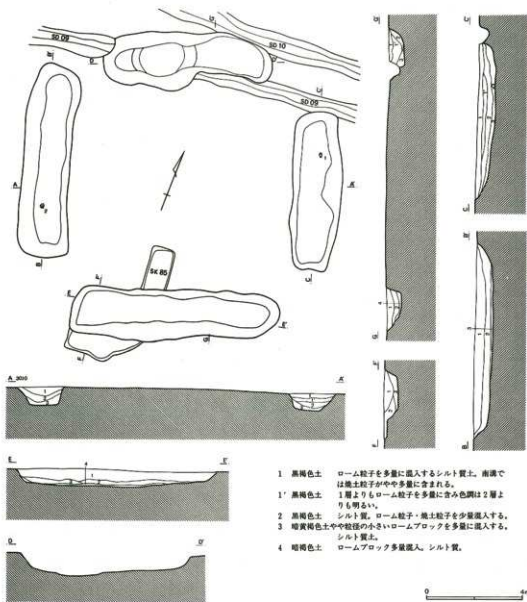
C区第7号方形周溝墓出土遺物観察表(第323-324図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	9.2	4.5		ABC	A	橙	100%	No7 南溝覆土(+15cm) 赤彩
2	鉢	(10.4)	3.8		ABE	C	黄橙	15%	南溝覆土
3	小形埴	(11.8)	4.8		AB	A	にぶい	40%	南溝覆土
4	埴	(10.6)	9.2	3.0	A J	B	にぶい	50%	No11 西溝覆土下層(+6cm)
5	小形甕		13.8	5.1	ABC	A	浅黄橙	90%	No2 南溝覆土(+48cm) 無彩
6	甕		5.0		AB	A	にぶい	65%	No8 北溝覆土 無彩 非在地産
7	壺	13.5	14.8		ABC	A	浅黄橙	85%	No8 南溝墳底 赤彩
8	壺	(13.2)	9.6		ABC J	C	橙	20%	南溝覆土
9	大形埴	17.4	9.6	6.8	ABC	A	浅黄橙	100%	No6 南溝覆土下層(+13cm) 赤彩
10	壺	23.6	28.5		ABC	A	にぶい	75%	No4 南溝覆土下層(+11cm) 赤彩
11	壺	(14.1)	24.0		ABCE	A	橙	75%	No3 南溝覆土下層(+16cm) 赤彩
12	壺	15.8	37.0	(10.4)	ABC	B	浅黄橙	80%	No5 南溝覆土下層(+9cm) 赤彩
13	甕	(14.6)	24.1	7.8	ABC	A	橙	40%	No1 南溝覆土(+28cm) 吉ヶ谷系
14	甕		20.4		ABC	A	灰褐	35%	No10 北溝覆土(+40cm)
15	小形埴	(11.8)	2.4		ABC	A	橙	10%	No40 南溝覆土
16	大形壺		2.4	8.6	ABC	B	にぶい	70%	覆土 赤彩不明
17	大形壺		2.1	(11.0)	ABCE	B	橙	40%	覆土 赤彩
18	壺		3.8	5.7	ABC	A	橙	80%	No13 西溝覆土 無彩
19	高 坏		3.8		ABC	B	橙	80%	南溝覆土
20	高 坏		3.9		ABC	A	橙	80%	無彩 覆土
21	壺		2.1	5.8	ABC	B	橙	80%	覆土
22	皿	(11.0)	2.5	5.8	AC	B	浅黄橙	40%	西溝覆土 混入 土師質皿
23	坏		1.6	(8.5)	AC	A	灰	40%	南溝覆土 混入
24	甕	(18.0)	7.0		ABC	C	にぶい	25%	南溝覆土 混入
25	甕				ABC	B	橙		覆土
26	甕				ABC	C	橙		覆土
27	甕				ABC	B	にぶい		南溝覆土
28	甕				AB	A	明黄褐		覆土

C区第8号方形周溝墓(第325図)

台地北縁部のD・E-24・25区に位置する。西側約4mに第2号方形周溝墓、東側には第9号方形周溝墓がほぼ接するように構築されていた。周溝間の距離は僅か18cmしかなく、確認面がもう少し高ければ直接の切り合い関係が存在したかもしれない。何れにせよ両周溝間に構築段階の時期差が存在することは疑いないが、本周溝墓の東溝が第9号周溝墓を避けている様子は特に窺われない。北溝は第9・10号溝跡、南溝は第85号土壌の攪乱を受けていた。形態はいわゆる四隅切れのタイプに属し、方台部はほぼ方形を呈する。方台部の規模は東西長9.44m、南北長8.56m、主軸方位はN-19°-Wを示す。

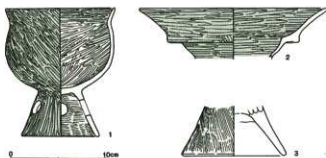
周溝は隅丸長方形を基本としている。方台部側の壁ラインは比較的直線的で、北溝西半のみ方台部を挟り込んでいた。周溝外縁部は僅かに外に膨らむ傾向はあるものの、四隅切れタイプの中では整った形態といえるであろう。但し、南溝西端には浅いテラス状の張り出しが存在する。断面観察によれば、切り合い関係は認められず周溝墓に伴う施設と推定される。周溝底面形態を縦断方向で観察すると、北溝と東溝が船底状に中央部が深く、南溝と西溝が比較的平坦であった。溝の立上が



第325図 C区第8号方形周溝基



り角度は内壁が直角近く鋭く立上がり、外縁側がやや緩やかな傾向にある。各溝の規模は、北溝が長さ7.20m、最大幅2.40m、最大深度0.80mを測り、西寄りの底面は土壌状に一段深く掘り込まれていた。東溝は長さ8.60m、幅2.12m、深さ0.76m、南溝は長さ8.76m、テラス部を除いた幅2.20m、深さ0.70m、西溝は長さ8.16m、幅2.08m、深さ0.76mを測る。周溝覆土は基本的に4層に分かれ、堆積状況は各溝ともに概ね類似していた。一次堆積土はロームブロックを多量に含む第3層或いは第4層で、方台部側からの流入土で構成されるものと考えられる。その後、第2層、第1層の順に堆積するが、第2層はロームの混入量が比較的少なく、外縁側からの流入土もかなり含まれている模様である。第1層は各周溝上層を覆い、ローム粒子が多量に含まれていた。



第326図 C区第8号方形周溝基出土遺物

出土土器は少ない。第326図1は東溝の底面から横転した状態で出土した脚付甕で、ほぼ完形。口縁部内面と外面は赤彩される。脚部には透穴が3孔穿たれている。2は西溝から出土した二重口緑の壺で、残存部以下は胴部に移行するものと推定される。頸部は短く中膨らみ状に外傾する点に特色がある。3は台付甕か。脚部は小さく、外面は刷毛目調整される。

出土地器は少ない。第326図1は東溝の底面から横転した状態で出土した脚付甕で、ほぼ完形。口縁部内面と外面は赤彩される。脚部には透穴が3孔穿たれている。2は西溝から出土した二重口緑の壺で、残存部以下は胴部に移行するものと推定される。頸部は短く中膨らみ状に外傾する点に特色がある。3は台付甕か。脚部は小さく、外面は刷毛目調整される。

C区第8号方形周溝基出土遺物観察表(第326図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	脚付甕	11.4	13.5	8.0	ABC	A	浅黄橙	95%	Na1 東溝覆土 赤彩
2	壺	(19.4)	5.3		ABC	C	浅黄橙	45%	Na2 西溝覆土 (+30cm) 赤彩
3	台付甕		5.2	(10.4)	ABC	C	浅黄橙	25%	北溝覆土

C区第9号方形周溝基(第327図)

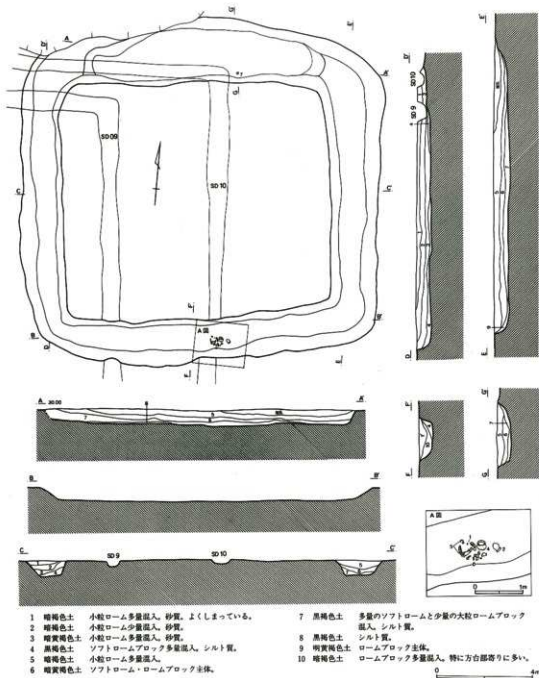
台地北縁のD・E-24・25区に位置し、西側にある第8号周溝基とは僅か0.18m、東側に位置する第10号周溝基とは約3mの間隔をおいて構築されていた。また、南西コーナー部外側には古墳時代前期の第12号住居跡がほぼ接する位置に検出された。北溝西半は後世の削平を受け溝外縁部は遺存しない。その他、第71号住居跡及び第9・10号溝跡の攪乱を受けていた。

形態としては全周タイプに属する。方台部は東辺に比して西辺が僅かに長い梯形に近い形態を採り、コーナー部は全体に丸みをもつ。規模は東西長11.32m、南北長9.90mを測る。周溝外縁部は南溝及び北溝が大きく外方に膨らんでいる。主軸方位はN-7°-Wを示す。

溝幅は北溝と東溝が広く、南溝から西溝にかけて幅狭となる。溝底面は部分的に深い箇所が見られるが、全体的には平坦である。溝の横断面は逆台形を呈する。総じて方台部側の方が鋭く立上がり、外縁側部では相対的にやや緩やかな傾向が認められた。各溝の規模を最大幅、深さの順に記すと、北溝が2.60m、0.76m、東溝が2.68m、0.60m、南溝が1.96m、0.60m、西溝が1.88m、0.64mとなる。

周溝覆土には、全体的に方台部盛土に起因するものと思われるロームブロックと同粒子が多く含まれていた。各溝の層対比は攪乱等の影響もあり十分ではないが、基本的な埋没状況は類似している。また、縦断面の観察から特に土層の乱れは認められず、全て自然堆積とみてよからう。

出土土器は小形埴、埴、壺、甕、小形甕、高坏が検出されたが、量的には少なく図示したものが

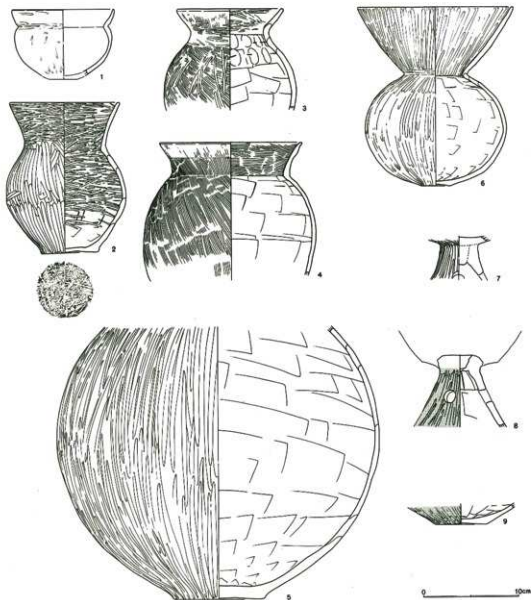


- | | | | |
|---------|------------------------|---------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 小粒ローム多量混入。砂質。よくしまっている。 | 7 黒褐色土 | 多量のソフトロームと少量の大粒ロームブロック混入。シルト質。 |
| 2 暗褐色土 | 小粒ローム少量混入。砂質。 | 8 黒褐色土 | シルト質。 |
| 3 暗黄褐色土 | 小粒ローム多量混入。砂質。 | 9 明黄褐色土 | ロームブロック主体。 |
| 4 黒褐色土 | ソフトロームブロック多量混入。シルト質。 | 10 暗褐色土 | ロームブロック多量混入。特に方台部寄りに多い。 |
| 5 暗褐色土 | 小粒ローム多量混入。 | | |
| 6 暗黄褐色土 | ソフトローム・ロームブロック主体。 | | |

第327図 C区第9号方形周溝墓

ほとんどである。第328図1・2・4～6は南溝中央部の底面から10cm前後浮いたレベル、土層に対比すれば第11層中から纏まって出土した。一定程度埋没が進んだ段階で溝中に転落したものと推定される。3・8・9は北溝の覆土から出土した。東溝及び西溝からは土器は殆ど出土しなかった。

第328図1は小形埴である。底部を欠くが故意のものであるかは不明。風化しており、赤彩は一部に確認できる程度である。2は小形甕と考えた。プロポーション的には吉ヶ谷式の甕に類似するとみることできる。内面は吉ヶ谷式の甕にみられるような横方向のヘラミガキが施される。外面は横、及び縦ヘラミガキで縄文は施文されない。底部には木葉痕が残る。3は小形の壺で刷毛目調整後、部分的にヘラミガキが施される。口縁部は内弯気味に立上がり、頸部の屈曲は比較的強い。4



第328図 C区第9号方形周溝墓出土遺物

はおそらく台付甕になろう。口縁部は「く」の字に外反し上半をヨコナデされる。6は中型の埴で底部は小さく凹む。底部に穿孔はない。7・8は高坏脚部でほぼ接合された痕跡が残る。

C区第9号方形周溝墓出土遺物観察表(第328図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小形埴	(10.6)	6.9		ABC	C	浅黄橙	35%	No12 南溝覆土下層 (+7cm)
2	小形甕	14.3	15.9	6.0	ABC	A	浅黄橙	95%	No3 南溝覆土下層 (+10cm)
3	壺	11.0		10.6	ABE	A	にぶ黄橙	35%	北溝覆土 赤彩痕なし
4	甕	14.8	14.5		ABC	B	橙	80%	No4 南溝覆土下層 (+6cm)
5	壺		28.5	9.5	ABC	A	浅黄橙	90%	No11 南溝覆土下層 (+5cm)
6	埴	16.2	18.7	3.0	ABE	A	にぶ黄	60%	No6 南溝覆土下層 (+13cm)
7	高坏		4.6		AC	A	橙	80%	No2 南溝南壁際上層 無彩
8	高坏		7.1		ABCJ	B	にぶ黄	80%	No1 北溝覆土上層 (+40cm) 赤彩
9	壺		2.2	5.4	ABC	A	橙	60%	北溝覆土 赤彩

C区第10号方形周溝墓(第329図)

調査区北東部のD・E-27・28区に位置し、2m程隔たった西側に第9号周溝墓、東側に第15号周溝墓がそれぞれ隣接する。南西コーナー部には第71号住居跡のカマドが乗り、東側1/3程は水田造成により上面は削平されていた。北溝外縁部は僅かに調査区外に延びるため全掘できなかったが、形態は全周型に属する。方台部はほぼ方形を呈し、方台部上面の規模は東西長12.80m、南北長11.68m、主軸方位はN-1°-Wを示す。

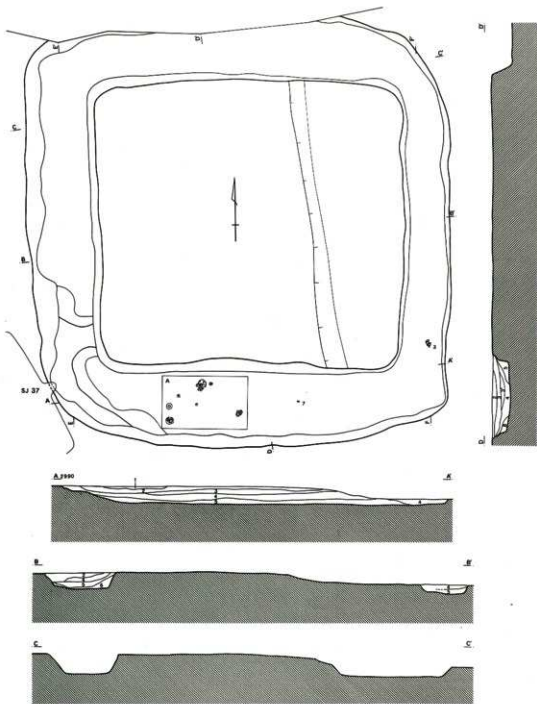
周溝外縁部の形状は東溝と西溝が比較的直線的であるのに対し、南溝が外に膨らんでいた。溝底面は南西コーナー付近が浅い他は、全体的に平坦で、溝内土壌は認められなかった。溝の断面形態を遺存状態の良い南溝と西溝を観察すると、基本的には逆台形であるが、方台部側の立上がり鋭く、外縁部のそれが相対的に緩やかな周溝墓通有な形態を示していた。溝の規模は北溝が幅2.76m以上、深さ0.90m、東溝が幅2.12m、深さ0.40m、南溝が幅3.80m、深さ0.80m、西溝が幅3.16m、深さ0.90mとなる。

周溝覆土は暗褐色から黒褐色土を基調とし、ロームの混入が目立った。北溝の対応は不明確であるが、他の溝では基本的な堆積状態は類似し、第4層～6層については主として方台部側からの埋没土で形成された模様である。また、南溝覆土から朱が僅かに検出された。

遺物は各溝から出土しているが量的には少ない。そのなかでも南溝の中央からやや西に寄った地点



南溝遺物出土状況

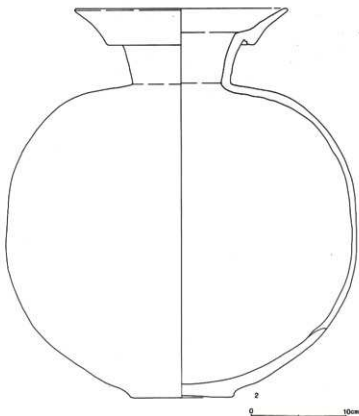
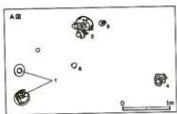
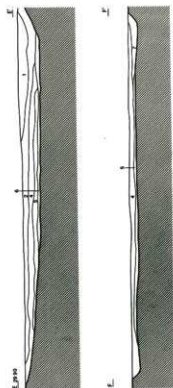


- 1 暗褐色土 黒褐色シルトブロック多量混入。
- 2 暗褐色土 ソフトローム少量混入。シルト質。
- 3 暗褐色土 小粒ロームブロック多量混入。砂質。3'層は色調がやや暗い。
- 4 黒褐色土 小粒ロームブロック多量混入。砂質。しまり無。

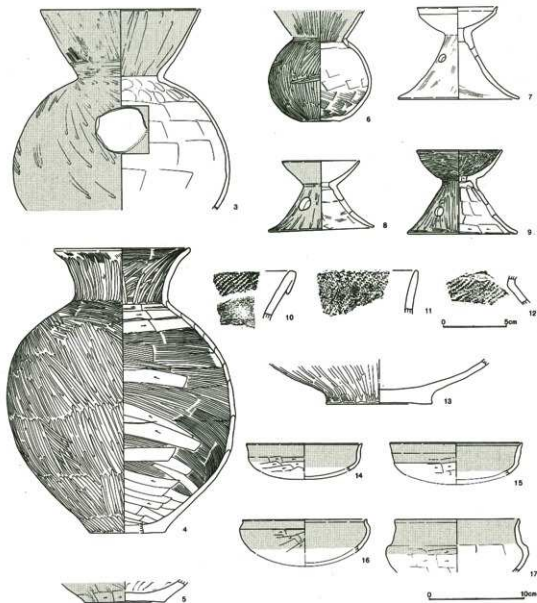
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量混入。
- 6 黒褐色土 大粒ローム・シフトローム多量混入。シルト質。
- 7 黒褐色土 少量の小粒ロームと多量の砂粒を混入。
- 8 褐色土 ローム多量混入。

0 4m

第329図 C区第10号方形周溝墓



第330图 C区第10号方形周溝墓出土遺物(1)



第331図 C区第10号方形周溝墓出土遺物(2)

の覆土下層から比較的纏まって出土している(第330図1・2、第331図4・6)。

第330図1は幅広の複合口縁をもつ壺で、頸部を欠く。口縁部には3本一組の棒状浮文が4単位付加されるがほとんどが欠損し、陰影でのみ確認できる。胴部は風化し、調整は不明瞭。胴部上半は刷毛目調整後ヘラミガキと思われるが、ミガキ痕は残らない。胴部下半ヘラミガキ。底部は大きく欠失し、穿孔の有無は不明である。2は二重口縁の壺で擬口縁部の張り出しは弱い。器面は風化し整形は不明。底部に穿孔は認められない。第331図3の埴は胴部にほぼ円形の欠損箇所がある。割れ方からみると内面から外面に向かって力が加わったものと思われ、焼成後故意に穿孔された可能性もある。4は単口縁の壺で底部は焼成後穿孔された可能性がある。南溝底面から出土した。7～9

は小形器台で何れも脚部径は受部径を上回る。10は幅狭の複合口縁壺で口縁部にはLRの単節縄文が施される。11・12はギヶ谷系甕の口縁部片と思われる。後者は頸部が「く」の字に折れる。外面はLRの単節縄文、内面横方向のミガキ。14～17は混入である。

C区第10号方形周溝墓出土遺物観察表(第330-331図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	21.6	33.9		ACE	D	橙	70%	No1,2 南溝覆土下層(+14cm)
2	壺	(22.0)	40.6	10.8	ABJ	D	浅黄橙	50%	No南溝覆土下層(+14cm) 赤彩不明
3	甕	16.8	21.0		ABC	C	橙	35%	No7 東溝覆土 赤彩
4	壺	14.0	29.8	8.0	ABC	B	浅黄橙	70%	No4 南溝墳底
5	壺		2.3	8.4	ABC	A	橙	70%	南溝覆土 赤彩
6	小形壺		11.5	4.0	ABC	A	浅黄橙	70%	南溝覆土下層(+16cm) 赤彩
7	小形器台	8.3	9.7	12.4	ABC	C	浅黄橙	95%	No8 南溝墳底 赤彩不明
8	小形器台	8.0	7.4	10.9	ABC	B	橙	75%	北溝覆土 赤彩
9	小形器台	8.7	8.8	11.2	ABC	A	浅黄橙	100%	No5 南溝覆土下層(+13cm) 赤彩
10	壺				AB	B	橙		西溝覆土
11	甕				ACE	A	にぶい橙		南溝覆土
12	甕				AC	B	橙		南溝覆土
13	壺		4.7	10.1	ABE	B	にぶい橙	80%	西溝覆土 赤彩不明
14	環	(12.1)	2.9		ABC	A	にぶい橙	15%	南溝覆土 混入 赤彩
15	環	(13.8)	3.4		AJ	A	橙	10%	西溝覆土 混入 赤彩
16	環	(13.1)	3.5		ABC	A	橙	10%	南溝覆土 混入 赤彩
17	鉢	(13.0)	5.5		ABC	B	橙	15%	南溝覆土 混入 赤彩

C区第11号方形周溝墓(第332図)

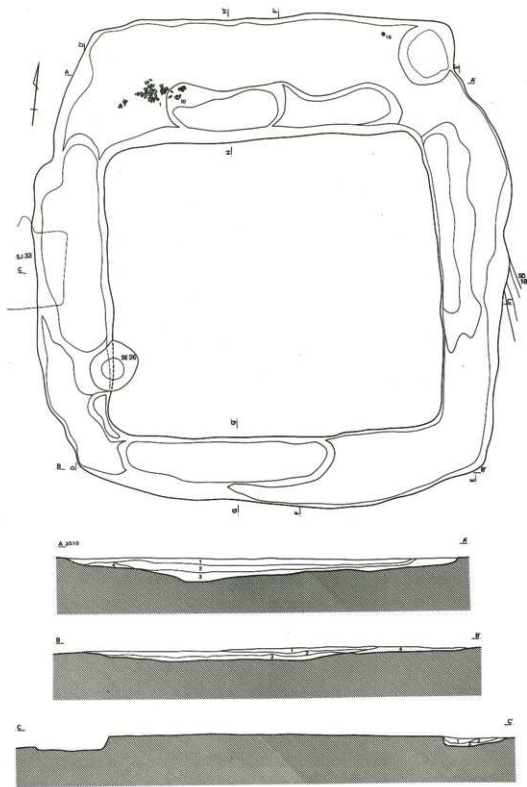
調査区東端部のE-G-27~29区に位置し、北側に第10・15号方形周溝墓が、南東に第16号方形周溝墓が構築されていた。西溝は第81号住居跡が構築されていた他、方台部上にも古代から中世にかけての土墳群やピット群、井戸跡に攪乱されていた。形態は全周型に属し、方台部はほぼ方形を呈する。方台部の規模は東西長13.92m、南北長12.44mを測り、主軸方位はN-9°-Wを示す。

周溝外縁部は外に張り出し気味で溝幅も一定しない。底面は凹凸があり、各溝共に、方台部直下が一段深く掘り込まれていた。溝の立上がり角度は方台部側は直角に近く、外縁部側は緩やかである。溝の規模は北溝が最大幅5.28m、深さ1.20m、東溝が最大幅3.40m、深さ0.45m、南溝が最大幅3.12m、深さ0.52m、西溝が最大幅3.20m、深さ0.52mを測る。

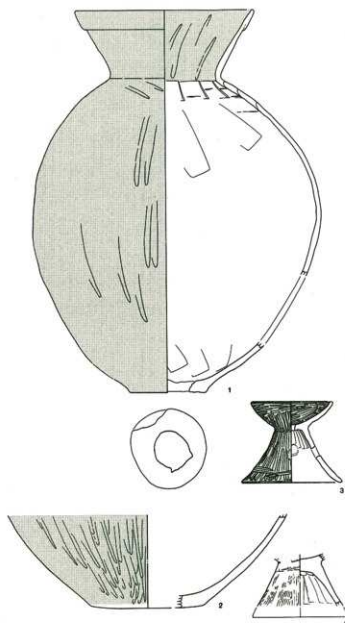
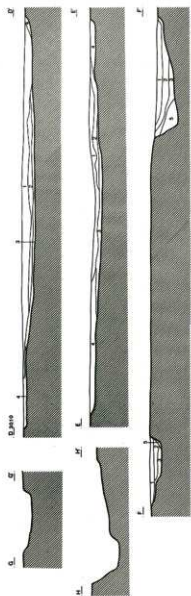
周溝覆土は基本的に5層に分かれるが、後世の攪乱土も部分的に認められた。各溝の堆積状態は概ね類似し、全体に砂礫が多量に含まれていた。堆積環境は必ずしも明確ではない。砂礫とロームブロックの混入から見ると、方台部盛土の崩落土を主体としていたと考えるのが妥当であろうか。

出土遺物には混入土器がかなり多い。伴うものとしては第333図1~9・334図10が挙げられるにすぎない。第333図1と第334図10の壺は北溝西寄りの覆土下層、層に対比すれば凡そ第3層上面付近から何れも細片に割れた状態で出土した。

第333図1は幅狭の複合口縁を呈する壺で、胴部は長胴気味になるものと思われる。底部は焼成後の穿孔が施されていた。ミガキ調整と推定されるが風化しており不明瞭。赤彩痕が僅かに残る。3は小形器台で出土位置は不明。脚部透穴は4孔となろう。4は甕口縁で、刷毛目後ヨコナテされる。

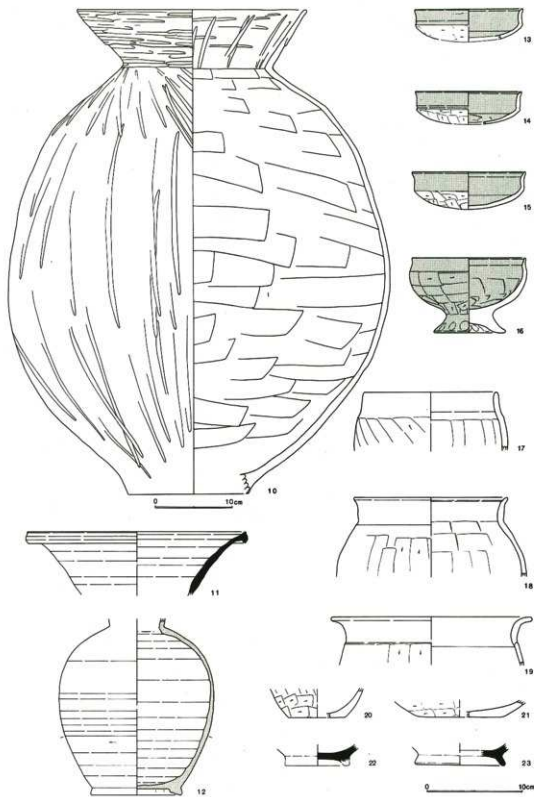


第332图 C区第11号方形周溝墓



- 1 暗褐色土 砂礫多量に混入。部分的にロームブロックと少量の褐色土含む。
- 2 暗褐色土 砂礫を主体にロームブロックと褐色土混在する。
- 3 暗褐色土 多量の砂礫とやや少量のロームブロック混入。
- 4 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量に混入。
- 5 黒褐色土 多量のロームブロック混入。シルト質。

第333図 C区第11号方形周溝基出土遺物(1)



第334图 C区第11号方形周溝墓出土遗物(2)

5は台付甕、6～8は吉ヶ谷系甕と思われる。外面にはLR単節縄文、内面は横方向のヘラミガキ。9は壺で外面はやはりLRの単節縄文と赤彩痕が僅かに残る。10は器高は63.2cmを測る大形壺で、幅広の複合口縁を呈するが複合部の段は弱く、あまりしっかりしたものではない。風化が進み調整は不明瞭で、口縁部と胴部外面に部分的にヘラミガキと赤彩痕が認められる。底部はおそらく焼成後、穿孔されたものと思われるが現状では不明瞭である。

C区第11号方形周溝墓出土遺物観察表(第333-334図)

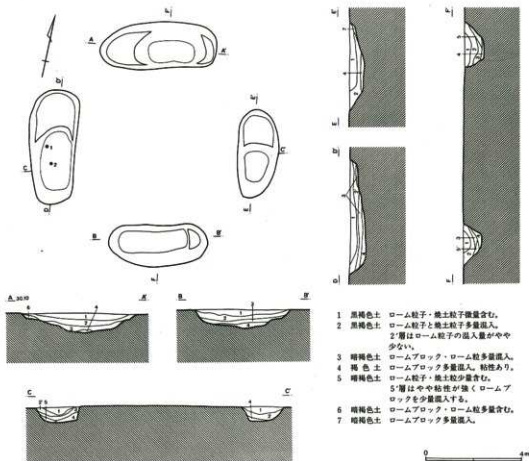
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	18.6	40.0	8.0	AB	C	橙	50%	№93他 北溝覆土下層 赤彩
2	壺		9.7	(11.0)	ABC	C	橙	20%	覆土 赤彩
3	小形器台	8.2	8.5	10.3	ABC	A	浅黄橙	70%	覆土 赤彩
4	甕	15.0	3.2		ABC	A	橙	30%	覆土
5	台付甕		5.4		ABC	A	橙	70%	南溝
6	甕				ABC	C	浅黄橙		覆土
7	甕				ABC	C	浅黄橙		覆土
8	甕				ABC	A	黄橙		覆土
9	壺				CE	B	浅黄橙		南溝
10	大形壺	30.0	63.2	(15.8)	ABCE	B	浅黄橙	90%	№86,87他 北溝覆土下層
11	甕	(23.0)	6.7		ABC	B	灰	10%	覆土 混入
12	灰輪瓶		18.4	9.4	G	A	灰白	45%	北溝覆土 鍍投産
13	坏	11.2	3.1		ABC	A	におい橙	25%	北溝覆土 混入 赤彩
14	坏	(11.0)	3.4		ABC	A	淡橙	30%	北溝覆土 混入 赤彩
15	坏	11.8	3.9		ABC	A	におい橙	75%	北溝覆土 赤彩
16	脚付柄	11.8	7.8	7.2	ABC	C	浅黄橙	90%	№165 北溝墳底 混入 赤彩
17	甕	(14.0)	6.2		ABJ	B	におい橙	25%	北溝覆土 混入
18	壺	(16.0)	8.3		ABC	A	浅黄橙	20%	北溝覆土 混入
19	甕	(20.8)	5.1		ABCE	B	浅黄橙	10%	北溝覆土 混入
20	甕		3.0	(6.0)	ABC	A	におい橙	35%	覆土 混入
21	壺		1.8	(9.0)	ABC	B	におい橙	35%	南溝 覆土 混入
22	高台坏		1.8		ABE	C	におい黄橙	60%	覆土 混入 土師質
23	高台坏		2.8	(9.0)	ABE	C	におい黄橙	60%	覆土 混入 土師質

C区第12号方形周溝墓(第335図)

E-21区に位置し、周囲を第1号・6号・7号・14号・17号の5基の周溝墓に取り囲まれている。形態は四隅切れに属し、規模としては小型の部類に入る。方台部はほぼ方形を呈するが、西壁部が若干南西に向かって開き気味となっていた。方台部の規模は東西長6.96m、南北長6.56mを測る。主軸方位はN-15°-Wを示す。

周溝の形態は方台部が比較的直線的であるのに対し、外縁部は総じて弧状に膨らんでいる。底面を縦断方向で見ると中心部が深くなるものと、最新部が片側に寄るものがある。周溝横断面形は逆台形に近い形態を採るが、壁の立上がりは方台部側の方が外縁部に比して急角度である。

各溝の規模を長さ、最大幅、深さの順に記すと、北溝が4.88m、1.96m、0.84m、東溝が3.68m、1.72m、0.64m、南溝が4.20m、1.72m、0.76m、西溝が4.84m、2.04m、0.68mとなる。陸橋部の間隔は北溝-西溝間が最も狭く1.96m、北溝-東溝間が最も広く2.60mを測る。



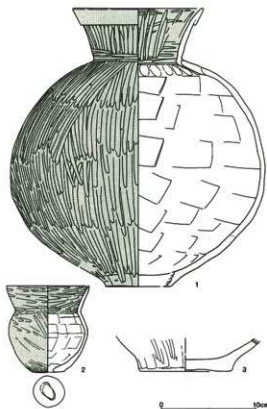
第335図 C区第12号方形周溝墓

周溝覆土は大きく7層に分かれる。上層ほど黒みが強く、下層ほど褐色味が顕著になるとともにロームの混入量も増加する傾向が見られる。断面観察に拠れば、第3層以下では方台部側からの埋没、おそらく方台部盛土の崩落が主要な堆積要因であったものと考えられる。また、縦断面の堆積状態は自然堆積を指向しており、墳内埋葬を示すような徴候は認められなかった。

出土遺物は少ない。第336図1は西溝の覆土中層、2は西溝の底面よりも僅かに浮いたレベルから出土した。1は幅狭の複合口縁を呈する壺。底部の大半が欠き、穿孔された可能性が高いものと推定される。口縁複合部はヨコナデ、頸部以下はヘラミガキが施される。赤彩痕は部分的に残るのみである。2は小形の埴とすべきか。底部は平底で中心部は焼成後穿孔されていた。口縁部及び胴部外面はヘラミガキ調整、胴部内面はヘラナデされている。口縁部と胴部外面は赤彩される。3は壺底部で正確な出土位置は不明である。

C区第12号方形周溝墓出土遺物観察表(第336図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.5	29.1	(6.8)	ABC	B	橙	70%	No2 西溝覆土中層(+10cm) 赤彩
2	小形埴	8.5	9.0	3.3	ABJ	B	橙	100%	No1 西溝覆土下層(+2cm) 赤彩
3	壺		3.5	(9.2)	ABC	A	いぶき	20%	覆土



第336図 C区第12号方形周溝墓出土遺物

C区第13号方形周溝墓(第337図)

調査区西域のG・H-18・19区にあり、北側に第1号周溝墓、北西側に第5号周溝墓が10m以上離れて位置する。周溝墓群のなかでも最も台地奥部に立地していた。南溝上面は第21号住居跡の攪乱を受けている。

形態は四隅切れのタイプに属し、規模としては第4号、18号周溝墓に次いで小規模なものである。方台部は南溝が歪むために台形を呈する。方台部上面の規模は東西長6.40m、南北長は中心部で5.48mを測る。主軸方位はN-15°-Wを示す。

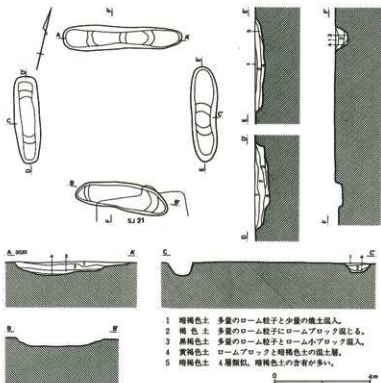
周溝形態は幅狭の長楕円形で、東溝と南溝では側縁が丸味をもつに対し、北溝と西溝の側縁は比較的直線的であった。周溝底面は総じて中心部が深くなる傾向にある。横断面形は逆台形を基調としており、方台部側、外縁部側ともに立上がり角度は鋭い。各溝の規模を長さ、最大幅、深さの順に記すと、北溝が4.96m、1.04m、0.64m、東溝が4.00m、1.16m、0.38m、南溝が3.92m、1.16m、0.33m、西溝が3.68m、1.12m、0.60mとな



る。

周溝覆土は基本的に5層に分かれる。下層にロームブロックの混入量が多く認められたことから、主要な堆積要因としては方台部盛土の崩落を想定するのが妥当かもしれない。但し、各周溝は幅が狭く、小規模であることからみると、掘削土量はかなり少ないものと推定され、果たして方台部全体を盛土し得たものかどうか疑問な点もある。

遺物は壺胴部片が北溝から検出されたのみで、図化可能な遺物はない。



第337図 C区第13号方形周溝墓

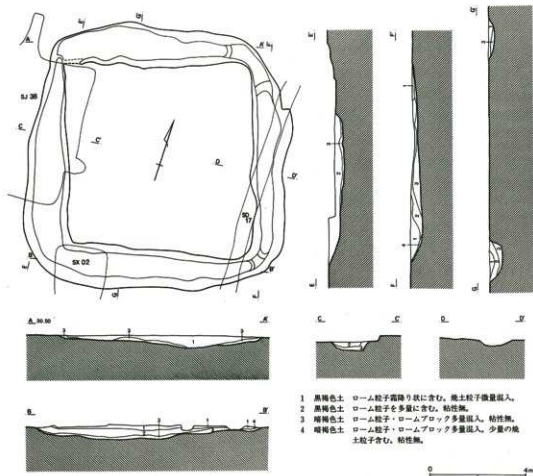
C区第14号方形周溝墓(第338図)

E・F-22・23区に位置し、北側に第2号・7号周溝墓、南側に第17号・18号周溝墓が近接して構築されていた。第37・38号住居跡等の攪乱を受け遺存状態はあまり良くない。形態は全周型に属し、方台部は攪乱と部分的に壁が崩壊していたために、やや歪んだ方形を呈する。方台部上面の規模は東西長7.84m、南北長8.08m、主軸方位はN-14°-Wを示す。

周溝は方台部側が比較的直線的であるのに対し、外縁部側は中央部に向かって膨らみをもつ。結果的に各コーナーの幅が狭くなり、特に北西部では削平の影響もあろうか幅は60cmと極端に狭まっていた。周溝底面は細かい凹凸は見られるが、土壌状の凹みは認められなかった。概して各コーナーの深度が浅く中心部に向かって深くなる傾向にある。各周溝の横断面形は基本的に方台部側の立上がりか鋭く、外縁部側がより緩やかで周溝墓に特有な形態を採る。溝の規模は北溝が幅1.84m、深さ0.52m、東溝が幅1.68m、深さ0.50m、南溝が幅1.88m、深さ0.56m、西溝が幅1.88m、深さ0.60mを測る。

周溝覆土は大きく4層に分かれる。中層以上(第1・2層)はローム粒子の含有量が多く、黒みが強い。下層はロームブロックが多く含まれ、褐色味が強い傾向が認められる(第3・4層)。第3層は堆積状態と包含物から方台部盛土に由来する崩落土と考えられ、各溝の最下層に堆積していた。全体に層厚は薄い、東溝のみ厚く堆積する部分がある。

出土遺物は図示した小形器台が1点検出されたに留まる。



第338図 C区第14号方形周溝墓



第339図 C区第14号方形周溝墓出土遺物

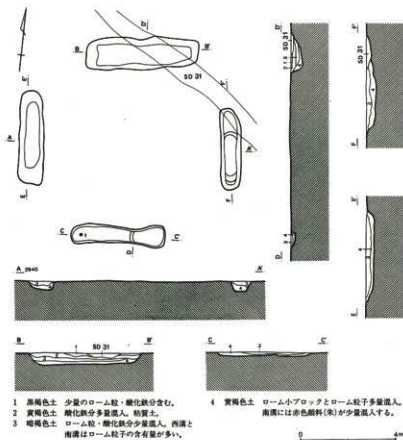
第339図1は小形器台で受け部を欠く。残高7.8cm、脚径10.6cm。胎土に石英、白色粒子、白色針状物質を含み、焼成は良好。色調はにぶい橙で、40%残存。接合しない2片から成り、脚部の透穴は3個一単位に2段、千鳥状に配される。外面へラミガキ、内面へラナデ、外面は赤彩される。

C区第15号方形周溝墓(第340図)

調査区北東部のD・E-28・29区に位置し、第10号・11号・19号周溝墓の中間地域に構築されていた。上面は水田造成のため削平されていたほか、第31号溝跡の攪乱も受け遺存状態はあまり良くない。形態は四隅切れタイプに属し、方台部はほぼ方形を呈する。方台部上面の規模は東西長7.40m、南北長6.64mと非常に小型の周溝墓で、主軸方位はN-7°-Wを示す。

周溝は全体に幅狭で、形態的には隅丸の長方形を呈する。側縁の形状は上面が削平されているた

めもあろうが、方台部側、外縁部ともに比較的直線的である。底面は東溝に段差が付く他は全体に平坦であった。横断面形は逆台形を基本とし、方台部側の方が壁の傾斜は急角度で立上がる傾向にある。各周溝の規模を長さ、幅、深さの順で記すと、北溝が4.72m、1.40m、0.45m、東溝が3.40m、0.88m、0.40m、南溝が3.96m、0.90m、0.20m、西溝が3.88m、1.08m、0.35mとなる。各周溝の規模は方台部の規模と対応し小さいが、その中では北溝が最も大きく、且つ深い。陸橋部の幅は南東部が3.04mと最も広く、他は2.25m前後を測り、ほぼ均等である。周溝覆土は全体的に浅いことと、攪乱が入っているために各層の対比は厳密とは言いかねるが、概ね4層に分かれる。最下層(第4層)は堆積状態、及び含有物から方台部盛土の崩壊土と推定される。また、南溝第4層中には朱が少量含まれていた。



- 1 黒褐色土 少量のローム粒・酸化鉄分含む。
- 2 黄褐色土 酸化鉄分多量混入。粘質土。
- 3 暗褐色土 ローム粒・酸化鉄分少量混入。西溝と南溝はローム粒の含有量が多い。

- 4 黄褐色土 ローム小ブロックとローム粒子多量混入。南溝には赤色顔料(朱)が少量混入する。

出土遺物は南溝の底面から小形埴と思われる土器片が1点出土したのみである。

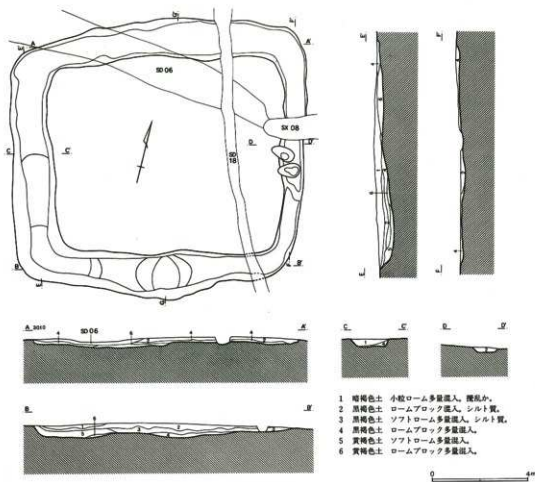
第340図1は小形埴類の胴部片と思われる。胎土には石英、白色粒子、白色針状物質が含まれる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。胴部の25%が残る。註記No.1。調整は外面ヘラミガキで赤彩されている。

第340図 C区第15号方形周溝基・出土遺物

C区第16号方形周溝基(第341図)

調査区東端のG・H-29・30区に位置する。溝跡等の攪乱を受け、遺存状態はあまり良くない。形態は全周型で、方台部は長方形を呈する。方台部上面の規模は東西長9.48m、南北長8.20m、主軸方位はN-18°-Wを示す。

周溝は中央部が外側に膨らみ気味である。底面は起伏があり、南西隅部が最も深い。横断面は逆



第341図 C区第16号方形周溝墓

台形を呈し、壁は方台部側の方がより鋭く立上がる。周溝の規模は北溝が幅1.92m、深さ0.40m、東溝が幅1.04m、深さ0.20m、南溝が幅2.05m、深さ0.65m、西溝が幅1.92m、深さ0.72mを測る。覆土は6層に分かれ、全体的にロームの混入量が多い。遺物は図示したもの他には、壺と小形の埴類片が検出されたに留まる。第342図1は複合口縁を呈する壺で西溝の遺構確認面から出土した。推定口径15.0cm、残高6.3cm。胎土に石英、白色針状物質を含み、焼成は良好。色調は浅黄橙で、約10%残存。口唇部と口縁部外面には縄文(単節LR)を横位に施文。頸部は赤彩される。

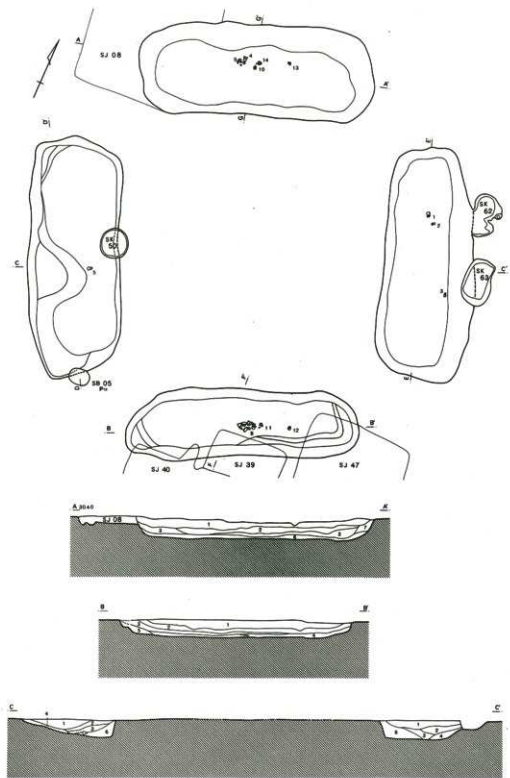


第342図 C区第16号方形周溝墓出土遺物

調査区は中央部のF-H-21~23区に位置する。古墳時代前期の第8号住居跡を切って構築され、第39号住居跡を初めとする古代から中世に及ぶ多数の遺構の擾乱を受けていた。形態は四隅切

C区第17号方形周溝墓(第343図)

調査区は中央部のF-H-21~23区に位置する。古墳時代前期の第8号住居跡を切って構築され、第39号住居跡を初めとする古代から中世に及ぶ多数の遺構の擾乱を受けていた。形態は四隅切



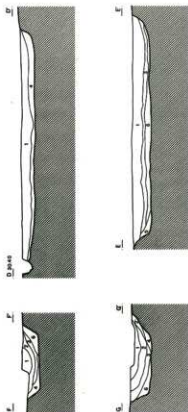
第343图 C区第17号方形周溝基

れタイプに属し、方台部は方形を呈する。方台部上面の規模は東西長11.36m、南北長11.52mを測り、南北に僅かに長い。主軸方位はN-24°-Wを示す。C区の周溝墓の中では主軸が最も西に振れているとともに、四隅切れ周溝墓としては最大の規模を有する。

周溝は隅丸長方形を基本形態とする。側縁は比較的直線的で、東溝外縁部は僅かに膨らみ気味となっていた。底面は概ね平坦で溝内土壌と言えるような落ち込みは検出されなかった。周溝の横断面形は逆台形に近いが、方台部側の立上がりは急角度で、外縁部側の方がより緩やかである。

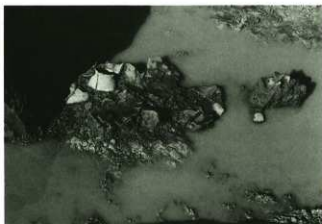
各周溝の規模を長さ、幅、深さの順に記すと、北溝が10.00m、3.84m、0.92m、東溝が9.62m、4.04m、0.80m、南溝が9.84m、2.84m、0.76m、西溝が10.20m、3.88m、0.75mを測る。方台部の規模に相応するように、各周溝の規模は比較的大きく且つ深度も深い。掘削土量としてはかなり多いであろう。

周溝覆土は大きく7層に分かれる。各溝毎に色調、含有物



西溝

- 1 黒褐色土
少量のロームブロックと、北溝は部分的に灰色粘土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土
多量のローム粒・ロームブロック混入。
- 2' 暗褐色土
2層類似。粘土粒子と灰色粘土混入。
- 3 明褐色土
多量のローム粒・ロームブロック含む。
- 4 黒褐色土
ロームの混入量少ない。粘性あり。
- 5 黒褐色土
ローム粒子少量混入。シルト質。
- 6 黄褐色土
ロームブロック・ローム粒子多量に含む。
- 7 暗褐色土
ロームブロック少量含む。



壺出土状況(南溝)

